

山 嶽 寮

甲南山岳会通信 第68号 2013年10月

甲南山岳部・甲南山岳会

山 嶽 寮 甲南山岳会通信 第68号

2013 年(平成 25 年)10 月

甲南山岳会会長就任にあたって	平 井 幹 男		1
随 想			
カ ン と ツ キ	平 井 一 正		3
秘 湯	飯 田 進		6
紀行・山行			
バイクで岬を巡る旅	安 井 正		9
海谷高地から阿弥陀山	山 本 恵 昭		13
海外だより			
近況報告 バリ島から	住 友 健 時		15
山 岳 部 から 海 外 へ	西 濱 昌 典		16
エッセイ			
8000メートルをめぐる話	雨 宮 宏 光		19
追 悼			
訃 報 ・ 塩 野 良 之 助 様	越 田 和 男		35
訃 報 ・ 熊 谷 治 様	井 上 知 三		36
会 員 短 信			
平成 2 4 年 秋			37
平成 2 5 年 春			41
報 告			
秋 の 集 会			46
山 岳 会 総 会			47
ホームページから			
山行と集い 掲示板ダイジェスト			49
残しておきたい書き込みあれこれ			68

甲南山岳会会長就任にあたって

平井 幹 男 （昭50文）

4月の総会にて、武田会長からバトンタッチを受け、甲南山岳会会長に就任いたしました。

山岳会会員としての活動を振り返ってみますと、大学卒業の次の年、現役部員担当として携わったのがスタートでした。この時の山岳部は小さなトラブルが相次いでいたため、レベルアップも兼ね、務めさせていただきました。その当時の大学生部員たちとは、今も親交があり、大切な山と酒の仲間となっています。

4月の中頃、長野県を南から北へドライブする機会がありました。今年の長野の桜は早く開花したとの噂通り、高遠城址の桜に迎えられました。桜の向こうにうっすらと浮かぶ南アルプスの山々が心の中に染み込んでいくようでした。

蓼科では小雪舞う生憎の天気でしたが、翌日は一転快晴。南アルプス・ハケ岳に始まり、松本付近からの大滝山・蝶・常念岳。さらに北上するに従って鹿島槍から五竜・白馬。右に焼・火打・妙高。手前に雨飾山。さらに、糸魚川から北陸道を西に朝日ICを過ぎ黒部川を渡ると、左手に毛勝からいよいよ剣岳が眼前に迫ってきます。空の青さと山々の残雪の白、山麓を取り巻く桜のピンク…

もう一度、あの山々の頂や稜線に立って、残雪を蹴散らしたらどんなに気持ちが良いだろう。数年前、いや数十年前にそれらの峰々を駆け

回り、岩を攀じた思い出が蘇りました。

遠く学生時代を思い返しますと、甲南大学山岳部 50 周年記念パーティーが開催されていました。あれから、もう 40 年ほどの時が経ち、時の流れの早さを感じます。

甲南山岳会の仲間と酒を酌み交わすと、気持ちはすぐに学生時代に戻ります。剣合宿の荷物の重さやチンネの岩肌の感触。楽しい思い出はもちろんのこと、苦しく辛かった山での生活も蘇っていきます。ですが、時間の中で記憶が上書きされているのか、全てが懐かしく愛おしい思い出です。また、山の仲間との会話は楽しく、私をリフレッシュさせてくれます。飲み会のあとは、日々の生活への活力が戻って来たものでした。

私は、現在、山に登ることはほとんどなくなっています。それでも、山は今でも心の奥底にあります。今でも、そう感じています。

懐かしい顔を思い浮かべ、山岳会総会の案内が来るのを、いつも楽しみにしていました。

山岳会総会では何年振りかにお会いする先輩方や後輩の顔を見て、思わず話し込んでしまいます。話すほどに、懐かしい思いが込み上げてきます。年齢の差があっても、同じ山を語り、若かったころの情熱を肴に、一緒に酒を飲むことができるのも山岳会の良いところですね。学生時

代のニックネームで、今もお互いを呼び合い、山での出来事(特に失敗!?)は永遠に語り継がれ、酒の肴となる。この素晴らしい雰囲気が、甲南山岳会の良さであり、魅力であると思います。

昨今、全国的に大学体育会の運動部に入学する学生が減少傾向にあります。我が甲南大学山岳部も例にもれず、ここ数年来部員が減少しており、新入部員ゼロという状態が続いているのが現状です。これは山岳会への入会者もゼロとなることに繋がります。また、若手の山岳会総会出席者が少ないということも踏まえ、私の山岳会会長としての役割は何かと考えてみました。

先にも述べました、山岳会の素晴らしい雰囲気を後輩たちに引き継いでいくとともに、皆さまがたが青春時代に思いを馳せ、自由に語り明かせるサロンとしての場を提供していくことではないかと思っております。

甲南大学山岳会の灯を消すことなく、できるだけ多くの人たちが参加し、語り合える場を提供していく所存です。甲南大学山岳会会員の皆さまがたが楽しんでいただけるよう、私を支えてくれる仲間とともに努力していきたいと思ってお

ります。

この文章に目を通してくださった方々、特に若手の会員の方には、是非、山岳会総会に出席していただきたいです。

昔の仲間と話してみてください。

沸々とした若き学生時代や友との素晴らしき思い出を共有して下さい。

熱かった青春時代が蘇ると思います。

もう一度、昔の仲間と集まりましょう。

一人でも多くの先輩方や後輩と顔を合わせて語り合いましょう。

皆がこの思いを共有できる限り、

『甲南大学山岳会は不滅です』。

再来年には 90 周年の記念総会も企画しています。お一人でも多くのかたの、ご参加をお待ちしております。

平成 25 年 5 月

創部 90 周年記念事業について

平成 25 年 4 月に開催されました山岳会総会にて、平成 27 年度に創部 90 周年記念総会を開くことが決まりました。詳細につきましては会長・世話役に一任いただきましたが、会員諸兄より広くご意見を伺えればと存じます。次回の山岳会総会にはぜひご出席いただき、記念事業についてのアイデアをお寄せください。

カンとツキ

平 井 一 正 （名誉会員）

1. はじめに

私は 1931 年生まれで、1950 年に京大山岳部に入ってから、山登りを続けてもう 60 年余になる。よき先輩、仲間に恵まれて、春夏秋冬山登りに熱中した。そして幸運にめぐまれて、1958 年のチョゴリザ (7654m)、1962 年のサルトロカンリ (7742m)、1976 年のシェルピカンリ (7380m)、1986 年のクーラカンリ (7554m)、そして 2003 年のルオニイ峰 (6805m) と、たびたびヒマラヤへ足を運んだ。

03 年のルオニイ峰こそ登頂できなかったが、私のそれまでのヒマラヤ登山では、隊員や隊長と立場はちがうがすべて初登頂に成功している。しかもすべての遠征では無事故で誰も命を失っていない。国内の山でも遭難という目には一度もあっていない。相手は大自然であり、何事が起こるか予想不可能であるだけに、この幸運は神に感謝している、そして表題のような話を折りにふれて考えている。このことについて少し書いてみよう。

2. カン

登山では総合的な判断力、持久力の他にカンというものが大切である。カンとは長年の経験と知識によって培われる。たとえば日差しの強弱、雲の動き、風の強弱、全身で感じるまわりの空気など、何となくおかしい、いつもとどこか違うという信号を自然は発信し

ている。そしてそれを無意識のうちに危険信号と感ずるかどうかがカンであろう。

シェルピカンリのとき、朝から小雪が舞っていた。しかし薄日もさしているので偵察に行くという上のテントの隊員の意見があったが、何か肌で感じるものがあって、上のテントにいた隊員をいったん下のテントにおろした。果たせるかな午後からガスがまき、次の日から 10 日間、雪が降り続いた。危ないところであった。天気予報もない当時、なぜそのような決断ができたのか、無意識であったが、それがカンではないかと考えている。

1979 年ラトック I 峰 (7145m) の初登頂を果たした重廣恒夫氏 (現 JAC 関西支部長) らは、何かを感じて C3 に泊まるのをやめて下のテントまで下りた。その日の晩に C3 は雪崩におそわれ、彼らは危ないところをまぬがれた。この事実もカンの大事さを示唆している。

あの人はついている、ついていないとよく言われる。たしかに何事も裏目に出て、失敗や不成功に終わる人もいる。「ついている」とはどういうことであろうか。人智をこえた運命的なものは確かにあるかもしれない。しかしそのような運命の中で、ついているリーダというのは、常に危険を事前に回避して成功を勝ち取るように努力していることも多い。それがツキにつながる。そしてそこには経験

に裏付けされた鋭いカンが必定である。

決定的な状況判断材料がないときにリーダーが決断を下すときに大切なのは、カンが働くかどうかである。人間が自然の中にとけ込むとき、カンが自然に身に付く。登山から遠ざかるとカンは鈍る。カンを育てるには経験をつみ、知識を蓄えなければならない。カンは登山だけに必要なものではない。経済運用など多くの場面で必要である。なぜその決断ができたか、あとで考えても分からないことが多いが、その分析を試みることは興味深い。

アルセーニエフ著「デルスウ・ウザーラ」は私の愛読書のひとつであるが、自然児デルスウ・ウザーラが、シベリアの密林の中で如何に自然から多くの情報を得て身の危険を回避していくかが書かれている。(黒沢明が映画化した)。(V.K. アルセーニエフ、安岡訳「デルスウ・ウザーラ」、小学館)

3. ツキ

1951年夏、私が大学の2年生のときであった。涸沢合宿が終わって、WとKと3人で北鎌尾根をおりていたとき、支尾根に迷い込んだ。けもの道らしきものがあるが、急なハイマツのついた岩尾根である。私は先頭であり、おいたてられるように進んだが行き詰った。ちょっとしたギャップがあり、ジャンプすれば飛び越えられそう。そこをジャンプしようとしたとき、体が金縛りにあったように動かなかった。何回も号令をかけて体にいいきかせたが、体は動かなかった。不思議な体験であった。Wが引き返そうと言ってホッと

したが、ジャンプすれば重い荷物に慣性がついて体は前方の空間に放り出されたであろう。あとで思い出すとぞっとすることであった。そのとき以来、私には運命の神がついていると感じた。

ついている、運命の神が私の味方してくれる、と信じることは、何か事をはじめようとするときに背中を押してくれる大きな力になる。大きな困難に立ち向かうときに困難を乗り越えられる原動力になる。自分の運を信じなくて何ができようか、という気持ちがいい方向に動く。隊を組むときは隊員に安心感をあたえ、余裕もできる。精神的に余裕がもてることは大事で、これが隊員の実力を引き出す。

ツキは何も登山にかぎらず、生死が紙一重の戦争では多くの事例がある。

チョゴリザのとき、日映新社から派遣されてきた潮田カメラマンは従軍カメラマンとして、中国やフィリピン、インパールなど多くの戦争に参加した。この人の話をきくと、人智をこえた何者かがこの人についていると思う。たとえば飛行場へ行く車がパンクしたために乗り損ねた飛行機が、また定員オーバーでおろされた飛行機が、敵機に撃墜されたとか、レイテでは部隊と分かれてひとり友軍の陣地をめざして助かったとか、幸運としかいえない多くの生死の境を切り抜けている。現在95歳でまだお元気である。

伊号潜水艦艦長板倉光馬は、荷物、兵員輸

送、戦闘などに活躍、多くの戦友が戦死している中、生き延びている。何故か、彼は書いている。

私自身どうして死地を脱したかわからないこともあった。もともと私は運命論者ではない、むしろ人生は自分で切り開くものださえ考えていた。しかし苛烈な戦闘に参加し、生死の間をさまよう内に、いつしか人力をもっては如何ともしがたい生命の不可思議さを感じざるを得なくなった。天の配剤というべきか、それとも自然の偉大な摂理と解すべきか、曰く言いがたいものがある。すべてを運、不運で断じえないまでも、運命が人生行路を大きく左右していることは否定できない。(板倉光馬 伊号潜水艦 光人社 02年)

4. ツキは人間だけでない。

第二次大戦の最初から最後まで戦って、一度も被弾せず、沈没しなかった幸運な駆逐艦がある。その名を雪風という。駆逐艦は甲板はうすく、ブリキ缶と言われた。被弾すれば一発で沈む。制空権の失われた戦争末期、ガダルカナル、ソロモン沖、ニューギニア海、レイテ沖、最後は戦艦大和を護衛して沖縄特攻作戦にも参加したが、この船だけが激戦を勝ち抜き、不沈の奇跡を生み出した。沖縄特攻作戦中、ロケット弾が命中したが、不発に終わったという幸運もある。

開戦時に同型の艦が 82 隻あったが、終戦時には雪風ただ一隻だけが残った。終戦後中華民国に引き渡されたが、雪風の返還運動がはじまり、46 年 雪風の錨と舵輪が返還、現在江田島にある。何が運をよびこんだか、調べ

てみると興味深い。(二宮隆雄 駆逐艦「雪風」、幻冬社)

(不運な艦もある。ついでに記しておく。

航空母艦 信濃 68000 トン、昭和 19 年 1 月横須賀で進水、松山に行く途中、米潜水艦におそわれ、生後 17 時間にして沈没。 航空母艦 大鳳 34000 トン、昭和 19 年 3 月完成、完成してわずか 3 ヶ月、6 月サイパン島の西方海域ではじめての戦闘で魚雷をうけて爆発沈没した)

5. おわりに

ツキとカンは理論的に解明できるものではないかもしれないが、いろいろな事例に当たると興味あることがわかってくる。私の今までの乏しい経験で言えることは、何事もまじめに、全力で目的に向かって努力すれば、必ず幸運を呼び込めるということである。

日本山岳会関西支部の例会で、廣瀬健三さん(大 36 経) とよく一緒に山を歩く。たまたま表題のような話になったときに、山嶽寮への投稿をたのまれたのがきっかけで本文を書いたが、底の浅いものになった。もっと資料を集めたい。

秘 湯

飯 田 進（昭 38 経）

最近温泉ブームである、グルメ旅館と対でテレビに登場する。馬鹿でかいタオルを巻いて入浴しているが、外人が観たらマネするんじゃないでしょうか。そういえば以前シンガポールでテレビ観ていたら、ドイツの女性アナウンサーが、日本の旅番組は、温泉に入っているか、ご馳走を食べているかだけである。もっと当地の歴史など紹介すればいいのに、と言っていた。

（これNHK衛星放送で日本語版）同感である。それでも温泉は増え続けている。

クイズ、全国都道府県で一番温泉施設が多いのは何処。答え、東京都だそう。

何せ全国で2万を超える温泉施設があるとか。単純計算しても、一県当たり425の温泉が湧き出ている（汲み上げられている）勘定になる。そこで目新しい温泉を探すのだが、これだけ増えると施設はどれもみな同じような作りである。そこでテレビでは、自然にできた温泉、秘湯というものに目を向け、秘湯番組が始まった。しかしもう日本には秘湯なる温泉はなかなか見つからない状態になっている。それでも秘湯は作られる。

先日それを見た。何処かの山中を温泉めがけて登っている。よくよく見ると、蓮華温泉から登ってきたようである。蓮華温泉に向かって下っているのではない、逆であった。

こんなところ登って行ったって、大池に出るだけである。はたしてスタッフは白馬大池にでた。そしてさらに白馬岳に登りそれから、白馬

鍾に向かい、最終鍾温泉に到達。秘湯を作り上げるのは容易なことではないようである。

秘湯とは言ってもお風呂。要はその場所がいかに風流であるか否かの問題。そこで小生体験した、秘境のお湯の話。

たしか昭和30年、高校三年生の夏。近所の幼馴染を誘って、立山、鋺登山に行った。立山を越え、鋺の天辺に立ったときは、その圧倒的な岩山の世界に感激。夏の陽浴びて、赤茶けて光る八峰の岩峰を観て“あんなとこサルでも登らへんで”。

“ほんまや”と言っていたのだが。まさか数年もしないうちに、ここをよじ登っているとは、このとき夢にも思わなかった。下りは長次郎雪渓。4つ爪のアイゼンと金剛杖で降りた。危ないことしたもんである。この日池の平小屋に泊まった。小屋の親父さんは愛想がよかった。夕方“学生さん、風呂が沸いたではいんなせい”と言って裏庭に案内してくれた。風呂は、ドラム缶風呂であった。初めての経験だった。入り方は五右衛門風呂と同じ、浮いているスノコをゆっくり踏みながら身を沈める。黒部の山奥、深山幽谷の真ただ中にドラム缶を設え、風呂を沸かして辺りを睥睨する。上がれば峨峨たる山塊から吹いてくる冷風が湯上りの火照を冷やしてくれた。最高の気分であった。これ秘湯ではないでしょうか。

それからしばらくして、名誉ある、甲南山岳会に入れてもらい、あちらの山こちらの山とほ

つつき歩いて、ある日、山からの帰り、松本で集結した。そこで、葛温泉に行こうとになって、仲間4人で出かけた。大田市郊外、高瀬川の右岸にポツンと建っている木造二階建て、一軒宿の名は河鹿荘。風呂場に通ずる廊下には、宿屋の主人が河原で集めた、自然石の宝殿さまがたくさん並べられていた。湯船も洗い場も広がった。山でくたびれた体を湯に浸してさっぱりしたところで、ビールで乾杯するべく湯に浸った。洗い場には先客、若い女性が赤ちゃんを洗っていた。洗い終えて放たれた赤ちゃんが、こちらによちよち歩いてきた。このままじゃ湯船に落っこちる。危ないと思って駆け寄った我々と赤ちゃんがどぶんと落っこちるのが同時であった。それともう一つ同時にお母さんが反応した。ばうや！といって振り返った姿が。

横綱の土俵入りには、二つの形がある。一つは右手を抱え、左手を広げ攻めの形にして競りあがる、雲竜型。もう一つは両手を広げ攻めの形で競りあがる、不知火型。お母さんの姿はこの不知火型であった。赤ちゃんは我々の素早い動きで、水も飲まず、事なきを得た。一気に体が火照った我々は、湯船を後にした。部屋に帰って冷えたビールで乾杯、となったが、K君が戻ってこなかった。しばらく待ったが来ないので、お先にと飲みだした。しかしK君は戻ってこなかった。心配して見に行こうか、と言い合っていると、襖がスーッと空いて、顔を真っ赤にした、いやまさにタコ入道のようになったK君が入ってきた。ふらふらしていた。“なにしとってん” “いや、あれから息子がいきりたって、おさまってくれず、おさまるまで湯に浸つ

ていたんや” なんとも純情で、元気はつらつのK君でありました。

その後昭和40年ころ、北海道で勤務していたとき、時たま丸駒温泉なるところに出かけた。支笏湖畔にある一軒宿で、アクセスは支笏湖畔から船でモーラップへ、そこから湖畔につけられた細道を3、40分かけて歩いていくこの細道が心細い。ヒグマが出そうな藪を切り開いたような道なのである。クマが出たら、湖に飛び込んで、潜って逃げよ、そう思いつつ、旅館に急いだものである。旅館は自家発電、8時には消灯。テレビ等はない。

それで風呂にでも入ろう、と薄暗い中湯船に浸っていたら、5、6人の女性がどやどやと入ってきた。昼間女中さんの気配などしなかったのに、何処に隠れていたのか。若き二枚目がいるというのに、まったく無視。このころ北海道の温泉はほとんど混浴であった。

その丸駒温泉が先日放映されていた。実に近代的な立派なホテルでありました。

狭い日本、何処へ行っても人家が絶えない日本で、秘境秘湯というものは、キリギリスやギンヤンマとともに消え去る運命にあるのかも。

ならば外国ならどうか。たくさんあると思う。たとえばカムチャッカ。半島と名がついているが、広さは日本の国土より広い。その東海岸には無数の火山が連なっている。ここのヒグマは大きいという。火山のおかげで雪解けが早く、エサが豊富なためとか。当然温泉も源泉かけ流し、で湧いているだろう。見に行きたい。があまりにも広い。それに未開発である。どうしたら行けるか。

ヘリコプター。このヘリコプターがやたらと値段が高い。30 分 10 万円と言われた。行こうか、いや待てよ、その 30 分、我々を載せて飛んでる時間かいな。それが問題である。ロシア人のことだ、格納庫から格納庫までの時間と違うか。その疑問は払拭されず、代わって浮上したのが、カムチャッカのスイス、と言われるエッソ。半島の中ほどにある。州都ペテロパブロフスキーカムチャッカから車を駆って一日半。それで出かけてみた。一日走って、ミルコーボという村に着いた。軍事基地らしい。学校のような建物のホテルに泊まったが、ホテルの小母さんが、日本人見るの初めてだ、と言っていた。そこからさらに半日走って、エッソに着いた。

州都ペテロパブロフスキーカムチャッカの郊外からミルコーボまで人家はなかった。時々小さな標識がたっていて、どこそこ村 11 キロとか 25 キロとか書いてあった。原住民の村があるらしい。行き交った車も二台長い砂煙を引きずって走ってきた。周りは白樺の樹林帯。畳半分の広さに白樺が 5、6 本も茂っていた。ミルコーボからエッソまで人家もなければ行きかう車もなかった。白樺の樹林帯もいつの間にか針葉樹に変わっていった。北緯 55 度くらいのところである。

ここも軍事基地らしい。ロシア人だけの小さな村である。針葉樹の森、タイガ以外何も見当たらない。ただ丘の上に沢山の標識が立っていて、モスクワ 8000 キロと書いてあるのが印象に残った。もう一つこの村はずれに、温泉が湧いていた。湯船はプール。情緒がなさすぎる。岩や石ころで作ってあったら、間違いなく秘湯

の名泉。なんせロシア人以外訪ねる人はまずおるまい。

訪れるのは鮭くらいのものであろう。鮭は沢山泳いでいた。原住民のイテルメンがこの鮭を食料としていて、鮭の遡上が遅れたり、少なかったら、絶滅するそう。ここは間違いなく秘境である。ただ秘湯かどうか。

なら本物の秘湯を紹介しましょう。

場所をご存じカラコルム山脈。スカルドを流れるインダス川に流れ込むシガール川を遡り、さらにブラルド川になって登っていくと、終点アスコーレの村に着く。ここが人の住む最奥の村。この先はバルトロ氷河である。そのアスコーレの一つ手前の小さな村がトンガル。

このトンガル村から川沿いに 30 分ほど歩いて、池ノ谷乗越のようなガラ場を 100 メートルほど登っていくと、上の台地に出る。この台地のどん突、400 メートルはあろう垂直の大岩壁の真下に温泉が湧いている。村の人たちが拵えたのであろう、小さな湯船が二つ作ってあった。長い間入った人がいないのであろう、鮮やかな緑色をした湯垢がびっしりついてた。向かいにはチリチョールの鋭峰が聳えていた。絶景である。そして小生が入浴した温泉では最高所、高度計は 3000 メートルを指していた。ここなら間違いなく秘境の秘湯であります。断言できます。嘘と思うなら行ってみてきてください。



— 紀行・山行 —

バイクで岬を巡る旅

安井 正 (昭40経)

2004 年 62 歳で定年を迎え、以前より行ってみたかった日本の岬を訪ねる旅に出る事とした。阪神大地震の年、氷ノ山の林道を走りに行く途中で転倒しバイクは十分走れたのに処分させられて以来バイクと付き合いがなかったので、家人をどう言い包めて手に入れるか苦慮。落ち着いたのがスクーター。これでは林道は勿論未舗装道路も走れないから安全と説得して中古の 250cc のスクーターを手に入れる事が出来た。

バイクで岬を巡る旅 北海道編

2005年6月～7月

6 月 23 日

夕方家を出て舞鶴港から 24 時半出航の小樽行きのフェリーに乗りこむ。

6 月 24 日

20 時半着岸し市内の「ホテル 123」にチェックイン。ここは旧北拓銀行小樽支店に手を加えたもので、しっかりした造りの洋館。金庫の分厚い扉がそのまま残されている。

6 月 25 日(晴れ)

早朝倉庫街をブラッとし朝食後 7 時 30 分いよいよツーリングスタート。

積算距離計は 12,622 k m を指している。しばらく車量の多い R5 からすぐ R337、R231 に入る。暑寒別岳山塊がそのまま海に落ち込み断崖絶壁が 25Km 続く西の知床と称さ

れる最初の雄冬岬は残念ながら真下をトンネルで潜ってしまう。留萌からは R232 と名称が変わるが、稚内まで集落以外建物、電柱はなく空と草原とあくまでもまっすぐ伸びる片側一車線の別称「日本海オロロンライン」、左は澄んだ日本海、行き交う車も殆どなく、北海道を走っているという実感を満喫。天塩から国道を外れ道道 106 号にはいり利尻富士が目に見え込んでくると今夜の宿稚内温泉民宿「メイロード」はすぐ。

15 時 30 分着。 12,972 k m 350 k m 走行

憧れた原野の一直線ロードの走行は恍惚感さえ感じる。ちなみに北海道の民宿はコストパフォーマンスが優れている、この先も楽しい予感。

6 月 26 日(晴れ)

天気もいいしここまで来て利尻礼文を見送る手はないと思い、今夜の宿を宗谷岬の民宿に急遽変更する。

「野寒布岬」を回って稚内港 7 時 50 分発のフェリーで利尻島鷺泊港 9 時半着、時計周りで沓形港まで走り、フェリーで礼文島香深港に渡る。13 時半から走り出し一旦南下して会津ノ崎を覗いて「スコトン岬」へ。途中礼文敦盛草を見ることも出来る。

香深港からフェリーで稚内へ戻り落日の中、「宗谷岬」からすぐの「民宿宗谷岬」に 19 時前到着。 13,148 k m 176 k m 走行

海はベタ風、礼文島は島全体が原生花園、

利尻島は走行中多様な顔を見せる利尻富士。礼文は歩く島で利尻は眺める島、何れにせよ本日の「島ツーリング」は正解なり。

6月27日(雨のち曇り)

夜中から雨が降り出す。「宗谷岬」は広い駐車場に何軒もの土産屋が並び、突端という感じも全くなき早々に退散する。雨も上り林間と海岸線が交錯するも直線が延々と続き、行き交う車のない R238 オホーツクラインを南下し網走を目指す。

途中「北見神威岬」の灯台を仰ぎ、「日ノ出岬」、「能取岬」を巡る。「能取岬」は寂寞としていて岬らしさ一杯。走っていると蝦夷鹿が挨拶してくれる。

昼前義母死去の知らせが入り、どうしたものかと思案したが丁度網走から女満別空港が近いので 28 日の関空行きの切符を買いに寄る。

15 時半網走湖畔の民宿「さくら荘」着。

13, 537 k m 389km 走行

「宗谷岬」は期待外れだったが R238 はオロロンラインとは趣を異とするも、いかにも北海道の道路という感じで、車ではなくバイクが似つかわしい気がする。

6月28日(晴れたり曇ったり)

飛行機が 15 時 40 分発なので、半日内陸部を走る事とする。

7 時過ぎ宿を出発、美幌町～美幌峠～屈斜路湖～弟子屈～摩周湖～阿寒湖～津別町から網走に戻り、時間潰しに刑務所博物館へ行って 14 時女満別空港着、バイクと荷物放置して関空に向かう。

13, 807 k m 270 k m 走行

峠を越える美幌国道、阿寒湖へ向かう阿寒横断道路共に景観は抜群。こんなに景色のいい素晴らしい道路が無料とは嬉しい限り。今日はキタキツネと遭遇。

6月29日 帰神

6月30日(晴れ)

15 時半女満別空港を出発して今夜の宿ウトロ温泉を目指す。気温 13 度と寒い！斜里からの R334 知床道路は海岸沿いでオホーツク海の青と砕ける白波に魅せられる。ウトロ温泉「みどり荘」17 時過ぎ着。

13, 909 k m 102 k m 走行

7月1日(晴れ後曇り)

早朝オシンコシンの滝を眺め、朝食後 7 時出発し知床峠を越えて釧路を目指す。知床五湖のうち一湖のみ歩いて周遊、蝦夷鹿がうろろうする横をしばらく走ると峠に着く。

羅臼岳が目の前に、この峠越えの知床横断道路はウトロから羅臼まで様々な山の眺めに雲海が幻想的なワインディングロードだが対向車も殆どなく気分の良さはたまらない。

羅臼は 12 度とやたら寒い。国後国道 (R305) を南下してトドワラで有名な野付半島の突端へ向かう。思ったほどトドワラが残ってなく大分風化した模様。ここから国後島まで 16 k m と近い。

根室半島の本土最東端「納沙布岬」～「霧多布岬」～「愛冠岬」～あやめ花園～釧路湿原 (見晴台から) を経て釧路市内の宿「すみれ荘」に 17 時半着。

14, 394 k m 485km 走行

知床峠からの風景、荒漠とした野付半島、「納沙布」、「霧多布」両岬の寂寥感等寒かったが気分のいいツーリングだった。

7月2日(雨後晴れ)

7時半出発するも雨、気温11度で寒いというより冷たい。雨は一時間ほどで止み陽が差し出した。釧路からR336を南下、特に広尾から庶野は波打ち際を走るので天候次第で通行止めになるらしい。ここは絶壁と岩礁のなか莫大な建設費がかかったので「黄金道路」の別名あり。庶野から道道に入ると草原地帯になり「襟裳岬」に行き当たる。10時半と少し早く観光客も疎らで気分はいい。

日高山脈が太平洋へ沈みこんでいく、岬の先端からもしばらく岩礁が連なるいかにも岬らしい岬だ。

霧の出易い場所らしいが今日はすっきり晴れ、しばらくの間水平線を眺めて至福の時を過ごす。馬の牧場が散見できる静内、新冠を抜けると苫小牧はすぐだ。15時苫小牧市内のビジネスホテルに入る。

14,777km 382km走行

天気が荒れて人けのない「襟裳岬」はさぞ雰囲気がいいだろうと想像する。

7月3日(晴れ)

6時過ぎから走り出して室蘭の「地球岬」に立つ。R37から途中外れて有珠山、昭和新山を縫い洞爺湖を眺めて国道に戻り、長万部という聞いた事のある町を過ぎてしばらく走ると前方に特徴のある姿の駒ヶ岳が目に入ってくる。

「恵山岬」に寄り函館と湯の川温泉の間

に位置し海沿いの民宿「北洋」に15時前到着。ここの親父は北洋漁業の船長で夕飯の魚料理は圧巻であった。荷物を置いて大沼へ駒ヶ岳を眺めに行く。その優しい姿は印象的。

16時半帰館。 15,218km 441km走行

夕食後バスで函館山へ行くも、霧がかかり夜景はさっぱり。今日の白眉は駒ヶ岳、大沼公園の景観もさる事ながら夜の魚料理に尽きる。

7月4日(曇り)

外は強風が吹いている。天気予報は明日の北海道全域大雨を報じているが、この風はバイクには強敵。しかし明日は沈黙しかなさそうなので思い切って出発する事にする。

この強風下小樽まで500kmを今日中に走り切らないといけない。このツーリング最大のピンチ。

案の定、右に左に押しやられ、路肩と対向車線を縫うが如き走り方、肩と腕が猛烈に凝る。

雨中也怖い横風の恐怖を身をもって体験し、あまり対向車が来ない北海道に助けられた。「白神岬」を踏んでR228を北上、途中国道を離れ尾花岬にも行きたかったが、その根性なく国道からすぐの「茂津多岬」へ。ここから積丹までは海際の道路で、奇岩が連続する景色に息を呑む。

R229追分ソーランラインを北上し「弁慶岬」、「神威岬」、「積丹岬」を踏んでフラフラになって小樽市内山腹にあるペンション「ゲストハウス」に17時前たどり着く。

15,722 k m 504 k m 走行

このペンションは一階が本業のイタ飯屋で二階に部屋が付いているという宿でレストランにて味わうオリーブ油の味と匂いは有り余る食欲を更に増幅する。

横風の恐怖から開放された安堵感から調子に乗ってワインなんぞを添えてみた。

7月5日(雨)

予報通り明け方から本降り。舞鶴行きフェリーは24時出港。

ゆっくりチェックアウトし先ずフェリーターミナルの駐車場にバイクを置いて小樽の街をうろつくこととする。「メルヘン交差点」とか「裕次郎博物館」をブラつくも時間がつぶれない。雨の中どこかに足を伸ばす気もなく、15時過ぎフェリーターミナルビルに入り時間を潰す。23時過ぎ乗船し人心地がつく。

6月25日小樽を出発し途中二日間中断したが、実走行8日で約3,000 k m なんとか事故、

故障、違反なく北海道の輪郭をなぞる事が出来た。

民宿の女将は「バイク族が随分減ってしまった」と嘆いていたが、勿体無い話だ。景観は言うに及ばず、高速道路並みの立派な道路に車両と信号の少なさによる走り易さ、民宿の料理の旨さなど文句のつけ様がない。

本州、九州、四国の岬を巡った後は北海道の内陸部を走ってみたいものである。



- 岬めぐり -

安井さんが8日間で走り抜いた「岬」。なまえを拾ってみました。どうぞ地図を思い浮かべてトレースしてみてください。

- ・「野寒布岬」・「スコトン岬」・「宗谷岬」・「北見神威岬」・「日ノ出岬」
- ・「能取岬」・「納沙布岬」・「霧多布岬」・「愛冠岬」・「襟裳岬」・「地球岬」
- ・「恵山岬」・「白神岬」・「茂津多岬」・「弁慶岬」・「神威岬」・「積丹岬」

新潟県 海谷高地から阿弥陀山 2013年5月3日～5日

山本恵昭（昭56理）

今年の5月の連休は、森本さん、井上さん、大森さん、私の4人で、頸城の阿弥陀山に登ってきました。この山域には標高は高くはないけれど独特な雰囲気を持った個性的な山が多く、なぜか魅かれるものがあります。数年前の3月、森本さんや浪川さんと山スキーで昼間山や鉢山に登り、阿弥陀山の東面にあたるアmana平を滑り降りました。その時に見た急峻な阿弥陀山の姿が強く印象に残っていました。今回は「越後の上高地」と呼ばれる海谷高地にベースキャンプを張って、西面から阿弥陀山にアプローチしてみました。

2日深夜に神戸を出発して、豊中で井上さん、大津で森本さんと合流し、雨の北陸道をひたすら糸魚川へ。

3日、登山口の山峡パークキャンプ場は駐車場以外すべて雪の下。世界ジオパークに認定されているだけあって、駒ヶ岳と千丈が岳の大岩壁がせまり迫力がある。昨夜の雨は山では雪だったようで、岩壁や木々は白く雪化粧をして美しい。

曇っていてすっきりしない天気だが、パッキングを済ませて7:30出発。夏道はほとんど雪に隠れ、急なトラバースやブッシュ漕ぎを経て迷いながら谷をつめる。威圧感のある岩壁に囲まれたV字谷から急に広い雪原に出ると、そこが海谷高地であった。11:00着。

河原の近くの雪原にテントを張り、スノーテーブルを作って昼食。午後は、皆さんが持

ち上げてくださった各種の酒を飲み、周囲の雪山や岩壁を眺めながらまったりと時間が過ぎてゆく。



だだっ広い雪原に、雪崩で先を吹き飛ばされた木々が転がっている。雪の融けた河原に木々を集めて盛大な焚火をする。雪代のせいか、腕のせいか、イワナは1尾のみ。夕方の一刻、日本海に沈む夕日が雲の下から海谷溪谷を経て射し込み、ガスに包まれた山の斜面を赤黒く染め、神秘的な雰囲気を醸し出す。



4日晴れ、6:00 発。雪の締まった阿弥陀沢左股をひたすら登りコルへ到着。夏道がないだけあって自然度は高く、クマの足跡があったりカモシカが尾根を横切ったりと、彼らの庭を訪問しているような感じである。



コルからは崩れた雪庇跡や綺麗な雪稜をたどり、最後は少しブッシュを漕いで、阿弥陀山山頂 9:00 着。急峻な山だけあって周囲は見渡す限りの絶景である。海谷溪谷をはさんで駒ヶ岳、鬼ヶ面、雨飾山が聳え、遠くには樺池から不親知へ続く長母の山々。すぐ北には日本海が近い。南面には、やはり以前山スキーで行った金山、昼闇山、焼山、火打山が連なっていて、それぞれに思い出が深い。



充分景色を楽しんだ後、さて下るとなると皆さんの年齢からは考えられないほど速い。阿弥陀沢左股をシリセード、グリセード、スケーティング、各自の好みで駆け下り、テントへ 11:00 着。スノーテーブルでのんびり昼食を済ませ、午後はまた風景を肴に贅沢な時間を過ごす。当然のように焚火三昧で、釣りあげたイワナ 3 尾を塩焼きに。



5日、ゆっくり撤収し 9:00 発。この3日間でかなり雪が融け、現れた夏道をつないで山峡パークに 11:00 着。

ヒスイの湯で汗を流し、スーパーで買出しをして糸魚川の公園で下山祝いの宴会をする。結構、同じような人達がいると思っていると、さすが富山湾、夜に接岸するホタルイカをすくいに来ている人達だった。仮眠後、6 日早朝に帰宅。

平坦な雪原が続く海谷高地と急峻な頸城の峰、豊かな自然と良い仲間、イワナ釣りと焚火三昧、とても贅沢な時間を過ごしてきました。

— 海外だより —

近況報告 バリ島から

住 友 健 時 （昭 55 法）

ご無沙汰しております。55 年卒の住友です。

昨日 face book のメッセージ欄に、「甲南山岳会の住友君ですね？」・「元気ですか？」とのメッセージが・・・

どなたからかと見てみると大先輩の塩崎さんからです。しばらくチャットでのやり取りの後、山岳会の掲示板に近況報告をしておくようにとご指示頂きました。

私は、昨年(2011 年)2 月よりインドネシアのバリ島に移住しました。ようやく 1 年半、生活にも慣れてきてのんびりとやっております。現地ではビラのオーナー業と居酒屋の共同オーナーで生計を立てています。

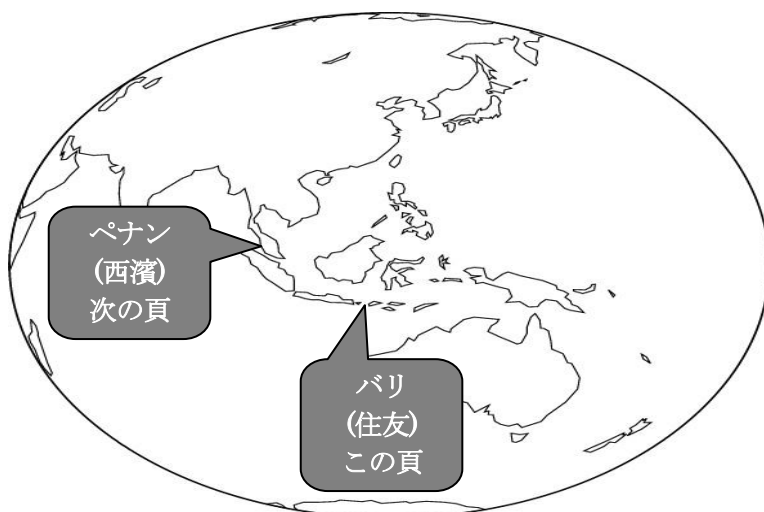
常夏の島なので年中Tシャツ・短パン・ビーチサンダルですごしています。

仕事の方もほぼ体制が整ってきたのでそろそろ波乗り三昧の生活に入ろうかと思っていますところ です。

かなり暇を持て余してきていますので渡バリなさる時には、ガイドでもなんでもさせて頂きますので声をかけてやってください。バリ島、山もいい所たくさんあるみたいです。

山岳会のメンバーの方の face book 利用率低いですね。とっても便利なんですけどね!!

(ホームページ 掲示板から転載 編集)



山岳部から海外へ

西 濱 昌 典 （平4理）

現在の私は・・・マレーシアのペナン島でこの文章を認めています。

本末転倒ではありますが、日本での仕事を辞めて仕事を探しにここまでやって参りました。なぜここまで来たのかこの場を借りて整理します、お付き合いください。



大先輩方には及びませんが甲南大学卒業後20年以上も過ぎました。

あの豊かな経験を得られた山岳部での活動は今でも掛け替えの無い財産であります。そして山岳部で習得した技術というのは、クライミング技術だけでなく生活全般にわたる技術であると確信するに至る今日このごろであります。

私が山岳部部員であった頃は、旧来の装備から革新的な装備への過渡期でありました。私も入部当初はキスリングや背負子、ウール地の衣類を使用していましたが瞬く間に姿を

消して行きました。それは、次々と新たな製品や素材が発売され合宿生活が劇的に快適なものへと変化していく事と同意でした。

私が一回生の時、冬季合宿で杓子岳から白馬岳へ抜ける主稜線上、アイゼン装着しなければならぬ所を寒さと空腹と疲れでバテてしまい自力でのアイゼン装着ができなくなってしまいました。そこで当時4回生の田中先輩が怒りながら私のアイゼン装着をして下さった事を今でも明確に思い返すことができます。その時の私のアイゼンは一本締めアイゼンでした。先輩方はワンタッチと言われるアイゼンバンドでのアイゼン装着でした。

そりゃあ経験もあるし装備も良ければ簡単に装着できるでしょう・・・と後で思うのですが、当時純真無垢な私は只々先輩方の強さと技術力に圧倒されるばかりでした。

ところが、私が4回生になるころにはビンディング装着のアイゼンに、靴は皮靴（通称「ドタ靴」）からプラスチックへと変化したのですから凄まじい変化です。

それでも厳しい冬季山行の生活には変わらないのですから、往年の大先輩方の山行生活はただならぬ忍耐と技術の上に成り立っていたであろうと簡単に想像できる所あります。

大学卒業後、海外へ出るようになって以来つくづく「山岳部入って良かったなあ」と思

っています。特に歩荷技術は秀でたところがあります。昨今、バックパッカーと称した旅行者を数多く見かけますが、彼らと同等容量のザックで2倍の量の荷物を梱包でき苦も無く移動できるのは山岳部員ならではの産物です。様々な場所や体勢で寝られるのも、様々な食生活に対応できるのも山岳部の経験に拠るものでしょう。

ただし、どんな旅行へ行くにも「ヘッドライト」と「合羽」が無いと不安になり手放せないのは悪しき習慣と言える所だと感じています。

大学卒業後にヒマラヤへの海外遠征を幾度か試みて全て敗退。その後約10年間のネパール在住を経て帰国、一度は日本に根を下ろす覚悟をしたものの、やはり海外の面白さを忘れられず再度海外に打って出ようと決心したのが大体3年前。

海外、特にアジア圏で介護ビジネスのニーズが出てくると考え介護福祉士の専門学校へ入学。在学中に細々と海外の求人等を調べていると北米系介護施設の求人募集要項には「実務経験1年以上」が基本であることから、卒業後1年の実務経験を経て海外へ出ると決めました。

以前からタイ国のチェンマイ市には世界各国からリタイアした人々が集うと聞いた事があり、またチェンマイ市在住の友人も同様の事を伝えてきていた事から、専門学校卒業論文は、「タイ国チェンマイ市における日本人高齢者の介護事情とその対策」としました。

因みに結論は「在留邦人には訪問介護に重きを置いた小規模多機能型施設が良い」です。

卒論作成中に「リタイアした日本人海外移住先の人気No.1はマレーシア」だと知りましたが、卒論の調査対象であるチェンマイでも外国人に対する介護サービスの提供が必要とされており、海外求職ではチェンマイを目指すのが良いと考えるに至りました。

今年初めに結婚した妻とも「仕事が見つからなかった時は新婚旅行と言う事で行きましょう」と腹をくくって辞表提出、そして出国。

マレーシアに入国し先ずは老人介護に不可欠な介護施設と病院を見て回る所から始めました。先ずは日本人が多いと言われるクアラルンプールとペナン島の介護施設を見て回ったところでデング熱に罹ってしまい入院の運びに。



デング熱・・・それはそれは辛い病気で、過去に経験のある伝染病「腸チフス」に比べたら天と地ほどの差でありました。デング熱治療はただひたすら安静にする事であり、病院のやる事と言えば「安否の確認」と「栄養補給」くらいなものでした。

注記) デング熱の辛さのあまり便所にて気絶しました。妻に助けてもらっている時に「パンツ履かせてから看護婦呼んでくれ」とか細かい声で懇願していたとの後日談あり。

デング熱入院を始めて1週間で病室を出て廊下に出る体力が出てきた頃、私の病室の前で熱心に読書にふける男性が一人・・・よく見るとどこかで見たことのある感じの冊子でります(但し英語版)・・・思わずその男性に「ものみの塔(宗教「エホバの証人」の冊子)ですか?」って声を掛けて居ました。

私の趣味である宗教が役に立った瞬間でした。

その男性は隣室の患者さんの次男さんで、一家で「エホバの証人」信者。患者さんは脳卒中で入院中との事。それを聞いた瞬間から「あっ仕事になるかも!」と思い慎重に話を意図する方向へ。

毎日廊下で世間話をするようになって3日目・・・勿論世間話とは名ばかりの必至の売り込みですが・・・とうとう先方から「うちの母親の介護に興味ある?」と、点滴を受けている私に聞いて来ました。まだ24時間点滴を絶やせない私に仕事の話が舞い込んだ瞬間です。

今になって思うと先方さんも肝の据わった人です。「どこの馬の骨とも知らん病人に病人

の介護を依頼する」事態が発生しているのですから。

退院後にそのまま彼らの家へ、我々夫婦二人で住み込み介護をする事になり今に至ります。

毎日、患者さんと24時間付きっきりでの介護。患者さんの容態改善や急変、そして再入院、再入国ビザの為の就職活動、毎日のようにやってくるエホバの証人の信徒さんたちとの会話と神エホバの勉強と抵抗、患者さん家族内の不和、等々。

ほぼ軟禁状態にも関わらず毎日が結構忙しく過ぎ去って行きます。

この先どうなる事やら・・・

山岳部との関係? 「毎日が山場なんです」



— エッセイ —

8000メートルを めぐる話

雨宮宏光（昭33経）

最年少13歳のエベレスト

2010年5月22日。米国人・ジョーダン・ロメロ君（13歳）。パパとシェルパで結成された「チーム・ジョーダン隊」の1人としてチベット側から登頂。

彼は2011年12月24日、ビンソン・マシフに登頂し7大陸最高峰登頂の最年少記録も更新。そのうち最年少の14座を達成するかもしれません。

最高齢57歳 無傷の14座登頂

アベレブランク（57歳）イタリアの山岳ガイド スキー指導員。

記者のインタビューに。

楽しみとしての登山に命がけなど馬鹿げている。「オレの手足を見てくれ。指は全部揃っている。いままでに怪我したことは無い」

彼の14座のうちカンチェンジュンガは登山中救援作業で酸素を吸ったが、それ以外は無酸素。カンチェンジュンガは無酸素で再登頂を計画している。

女性登山家——14座達成

2010年 エドウルネ・パサパン（37歳）スペイン

2011年 ゲルリンディ・カルテンブルネ（41歳）オーストリア

2009年7月時点で12座を達成していた次の4人が一番乗りを目指していた。

エドウルネ・パサパン（36歳）

ゲルリンディ・カルテンブルネ（39歳）

コ・ミヨン（韓国・42歳）

オ・ウンソン（韓国・43歳）

韓国勢14座レースから 脱落

韓国のコ・ミヨンは09年5月にマカルー、カンチェンジュンガ、6月にダウラギリ、7月にナンガ・パルバートに登頂し12座を達成。そのまま帰国せず現地に残ってガッシャブルム1峰、2峰と登って1年で6座登頂し、14座を4年で達成という破天荒な計画は、ナンガ・パルバートに登頂して下降中、滑落死して破綻。

韓国のオ・ウンソンが2010年4月27日、アンナプルナ登頂で14座達成と発表した。彼女の2009年、カンチェンジュンガ登頂は同行したシェルパの証言、登頂写真の真偽から大韓山岳連

盟によって否定された。ちなみにエドウルネ・パサパンの14座目シシヤパンマ登頂は、2010年5月17日。

ゴラン・クロップ（スウェーデン） 自転車でエベレストに

1995年10月16日。ゴラン・クロップ（29歳）は、登山装備を積んだ特注の自転車でストックホルムを出発した。7000マイル離れたカトマンズまでペダルを踏み、スウェーデンの海面からエベレストの頂上を極めるという壮大な周遊旅行計画がスタートしたのです。

ヨーロッパとアジアでの4ヶ月の旅の途中、野球のバットで殴られたり、トルコで銃撃されたり、イランでは石を投げられたりと散々な目にあったが、1996年4月、彼はエベレストの基地キャンプ（17100フィート）に登山装備を運びこんだ。

‘96年5月4日、クロップが頂上からわずか350フィートの標高差（8750m 地点）で引き返したのは、登頂時刻のタイムリミットを午後2時と決めていたからです。下のキャンプまで下降し元気を取り戻した彼は、エベレストの歴史で8人の登山者の命を奪った伝説的な嵐の数日後に再び登頂を試み、ソロ・無酸素、シェルパなしで——スウェーデン出発の日から約7ヶ月を経て——頂上を踏んだ。

この年エベレストには世界各地から20以上の隊が登頂を目指していて、先行者のトレースや固定ロープが利用できた幸運を割り引いても、ストックホルムからエベレストの頂上まで彼自身の足で到達したのです。

ベースキャンプで自転車に荷物を積み込みこんだクロップは、ふたたびストックホルムへと7000マイルの旅にペダルを踏みだした。

2002年9月30日、ゴラン・クロップはワシントン州でクライミング中に転落死。36歳で旅の人生を終えた。

出典 Ultimate High: My Everest Odyssey by Göran Kropp

クリス・ボニントンの エベレスト

正統派アルピニズムの継承者として息長く活躍。その彼が何を思ったのか、1985年南東稜からエベレストに登頂。それまでの新ルート、初登と違いもっとも簡単なルートを選んでいきます。

ジム・カラ「注」は、ボニントンは墮落したと評している。でもボニントンは8000mに登っていませんでしたね。それまでの彼の最高到達高度は7937m（アンナプルナⅡ峰）。もう50歳、8000mそれも世界一の高峰に登っておきたい。

理屈なしのこの登山、墮落とは思いません。

注 映像作家・ライター・クライマー。ボニントンのヒマラヤ遠征に映画撮影でしばしば同行。ボニントンの評伝『冒険の達人』～その登山と人生～の著者。

栗城史多 ネット中継の8000メートル

アンナプルナ

2010年7月17日放映『地球の頂へ』をご覧になりましたか。

栗城史多（くりき のぶかず）のアンナプルナ・ネット中継登山の番組で放映2時間。彼はこの中継を「冒険の共有」という。

防寒服・帽子に貼り付けられたスポンサーのロゴ・マーク。衛星通信設備を備えた大型のベーステント。

栗城史多は体に装着したカメラで自らの登山状況を撮影する。行動中、頻繁なBCとの通信のやり取り。茶の間でこの中継を見ている若者が栗城に送る激励の e メール。これに応じて高所で咳をこらえ、しゃべらねばならぬ栗城。

体調不良で登頂をあきらめたC4(7200m)のテントの中で「自分の登山はただ登るだけでは済まされないものがある」「本当に申し訳ない」と涙声のつぶやきをBCに送信。

そのメッセージがテレビに「お詫び」となって現れる。栗城の登山では、敗退したら謝らねばならないらしい。誰に、何を謝るのか。分からない。

エベレスト

エベレストは過去3回敗退している。栗城の時、動画撮影の作業に加え、通信機器、装備など10キロ以上を担いで、最終キャンプ、サウス・コルに登らねばなりません。サウス・コルからのアタックの時もサポーターへの配信は彼の仕事だから、撮影する、しゃべる、登るの一人三役を演じることになる。

ベースキャンプの映像を見ると数名のシェルパが映っている。彼等は何のために居るのか。ベースにいるシェルパは栗城を撮影するスタッフの支援だけ。栗城は彼らと別ルートを行くと、ホーム・ページにある。そのせいか登っているときの映像は栗城の単独シーンばかり。だいたい多くの登山者がひしめくエベレストで栗城の単独シーンだけって不自然。

他の登山者やシェルパ、先行者のトレース、固定ロープ使用のシーンが映っていてもいいじゃないですか。荷揚げ、ルート工作すべて栗城一人でやっているのですか。

ソロを強調する演出がみえみえの映像に「冒険の共有」など感じない。みんなで大騒ぎ、テレビのバラエティー番組を観ている気分。だが、ここで少し考える。ネットを通じて山を世に認知させた栗城の山タレントのような言動。これを昔、登山にあった観念にてらして「こんなものは登山じゃない」と言うのは正しくない。出身母体を持たず独力で山の世界に参入し、山をビジネスの対象として中継と講演で資金を集めた、起業家としての登山。これも登山です。

老婆心ながら一言。もうソロ、無酸素と称する「冒険ゴッコ」は止めて登頂だけに集中しよう。8000mは見世物の舞台ではない。

同じ日 同じ山に 二回登る

1957年6月9日のブロード・ピーク(8047m)。ヘルマン・ブールとクルト・ディーンベルガーは頂上を目指す。体調の悪かったブールは途中で気力尽きごろりと体を横にして動けなくなる。二人一緒にの登頂は無理とディーンベルガーは「一人で登ってもいいか」と訊ね、ブールが同意したので一人で登頂し下降中、立ち上がって再び頂上へと歩むブールの姿を見て彼を待ち、二人で頂上に。一日で二回も同じ山に登頂した。

ブロード・ピークのあと二人が目指したチョゴリザは、ブール最後の山。

1957年6月27日、ブールは雪庇を踏み抜き転落死。

K2 8611m からの生還

1986年、K2は異常な夏となった。世界中の著名な登山家が K2に集まり、登頂を狙っていた。クルト・ディーンベルガー達の混成チーム7人が、登頂後8000メートル付近のキャンプで嵐に閉じ込められ、天候回復と同時に脱出を図った5人のうち3人が次々と倒れ、ディーンベルガー(53歳)とヴィリーバウワー(42歳)の2人だけがかろうじて生還した。この嵐の夏、K2で13人の登山家が死んでいる。

現場登山者の生存をかけたむき出しのエゴ。他人のテントに平気で転がり込む。テントにある食料を勝手に使う。倒れていく仲間を見捨てていく……。

ディーンベルガーが生き延びた最大の要因に、チョゴリザでのヘルマン・ブール、死の教訓がある。一緒だったヘルマン・ブールは力を使い果たし、危険回避の思考力を失った結果死んだ。

K2から脱出の最中ディーンベルガーは、午後3時前に行動をやめビバークしている。「今日も生きている。今こうして冷静に明日の行動を考えられるのは、力を残してビバークしたから」と遺書になるかも知れぬ手帳に記している。

どうも分からないが彼の著を読むときディーンベルガーは一度も炊事をしていない。高所で雪を溶かして水を作る、食べ物を作る労力を彼は完全に避けていた。

水を作った仲間は死に、余力を残した彼は生還した。

8000メートルでの倫理 ～ 1996年5月11日のエベレスト

チベット側のチョモランマ、北東稜8000m地点。午前1時45分ごろ福岡のチョモランマ登山隊の2名は、シェルパ3名と共に頂上を目指して最終キャンプを出発した。

同じ日の同じ時刻エベレストの頂上を挟んで反対側の南東稜サウス・コルでは11名の男女が身を寄せてうずくまっていた。アドヴェンチャーコンサルタンツ登山隊とマウントマッドネス登山隊という二つの商業公募国際隊に、一人\$ 65000払って参加した登山客たちだった。

登頂には成功したが帰路嵐に遭ってルートを失い、前日のサウス・コル南端の最終キャンプを

出てからすでに25時間の行動、高所のビバークと全員が極限状況にあった。嵐が小止みになったのを見計らって自力歩行可能な6名が行動を起こし、30分ほどで最終キャンプにたどり着き救助をもとめた。

そこにはマウントマッドネス登山隊の筆頭ガイド、アナトリエ・ブクレイエフほか、先の二隊と台湾隊の合せて20数名の隊員、シェルパがいた。

ブクレイエフはそれらのテントを駆けめぐり自分と一緒に救助してくれるように頼んだが誰も動いてくれない。彼は単独でビバーク地点に向かう。ビバーク地点は最終キャンプから300mほどの距離にあり通常なら20分ほどでいける距離なのに、深夜しかも強い向風とあって1時間近くかかった。

その行為を彼は2回行い3名を救助した。そのあたりがガイドの体力の限界だった。

残されたのは難波康子さん(47歳)とベック・ウエザーズ(米・49歳)の二人。

一方福岡隊(以下日本隊と呼称)は午前6時ごろ北東稜を登ったあたりで雪の中にうずくまっていた一人の登山者(インド隊)と、8時45分ごろインド隊の隊員らしい二人の登山者を発見した。それももちろんどうすることもできない。

そのまま登り続け午前11時45分登頂に成功した。

そのころ雪原に残された二名のビバーク者の生命は尽きようとしていた。

午前7時ごろその二名とおなじ隊の登山客隊員が三名のシェルパを連れて救援に向かい二人を発見した。二人はまだ息はあったが、リーダ格の登山客隊員・スチュアート・ハッチスン(心臓外科医・35歳)はこういった。

「このままそっとしておこう」

結局二名の遭難者はまだ生きているのにそこに放置された。最終キャンプまでなら引きずってでもつれていける。それから先が問題である。自力で歩けない者を連れて下降するのは無理と判断したのです。

難波康子さんはたぶん11日に死亡した。遺体は2年後に夫、賢一氏が派遣したシェルパ収容隊によってベースまで運び下ろされ茶毘に付された。もう一人ベック・ウエザーズは、低体温昏睡から蘇生し翌12日の午後、自力でキャンプに辿りついた。サウス・コルからも彼は信じられぬほど巧みに歩きベースまで下山。帰国後凍傷で右手首と左手指4本を切断した。

一方登頂に成功した日本隊は下山中、セカンドステップ下り口でもう一度インド隊員の傍を通りすぎた。

一人は死んでおりもう一人も虫の息であった。日本隊の隊員2名は登頂したあと標高6300m地点でイギリス人ジャーナリストの取材をうけた。行方不明になっているインド隊員3名に関してである。隊員はこう弁明した。

「こちらも疲れきっていた。自分のことで精いっぱいだった」

そのようなインタビューにもとづいた5月18日のイギリスの新聞「ファイナンシャル・タイムズ」は次のような趣旨の記事を掲載した。

「日本隊は瀕死のインド隊員を見捨てて登山を強行し救助活動を怠った」

インド隊の顧問が、日本隊がまだ生きていたインド隊の傍を通ったのに、なぜ助けてくれなかったと発言しソレが本社でショッキングな見出しとして掲載されたのです。インド隊顧問の発言は日・印、両国外務省レベルの話あい、印度側が発言を公式に撤回した。

なおインド隊は日本隊が登頂した7日後、二次隊を出し5名が登頂した。登頂隊員は往復とも死亡した仲間の側を通りながら遺体を収容せず下山している。

高所は道徳うんぬんといえる場所ではない。下界での倫理観は通用しない。

『デスゾーン』 アナトリエ・ブクレエフ 『空へ』 J・クラカワ 『死者として残されて』 ベック・ウエザース
『永遠の未踏峰』 渡部由輝 以上四作に依拠

インドネシア軍のエベレスト

1997年4月26日、エベレストの頂上。インドネシア軍の兵士アスムジオノは、帽子をとって軍のベレー帽にかぶりなおし自国の国旗を広げた。

この遠征を指導したのはロシアの登山家ブクレエフ。彼は1996年秋カトマンズで友人のシェルパ、アン・ツエリンと会ったとき、翌年春にエベレストを計画しているインドネシア隊の相談役にならないかと持ちかけられた。

11月ジャカルタで遠征の総責任者であるプロベダ將軍と会い、6ヶ月程度の訓練期間を設けること、行動作戦の指揮を任せてもらうことに承諾を得た。インドネシアでこの遠征に選ばれたのは、少し登山経験のある民間人と全く山を知らない軍人の合計34名だった。

まず全員の個人装備、隊の共同装備、酸素等を調達し、'96年12月から'97年1月と2月にかけ6000mに近い山で登山技術習得と高度順応を行った。

最終選抜されたのは10人の兵士と6人の民間人。1997年4月25日、全員がサウス・コルに集結。

4月26日。3人の攻撃隊員の内、アスムジオノが登頂した。あとの二人、イワンは頂上手前80mまで。ミリオンは30m手前で倒れたが引き返そうとしない。

ブクレエフは彼の耳元で「ここは頂上だよ」と言った途端、ミリオンは立ち上がって下降にかかる。あくまでがんばるミリオンの希望に沿えば、下降時刻の限度を超えるとブクレエフは判断したのです。

なおインドネシア隊員をサポートしたロシアの登山家パシキーロフ（8000m・6回）とシェルパ・アパも登頂している。もう一人のロシア登山家ヴィノグロフスキー（8000m・8回）は、頂上手前80mまで。イワンの下降支援に回った。

いまさらのエベレストに総勢40名近いインドネシア人の滞在費、装備調達費、ロシア登山家三人の報酬と、かなりの費用をインドネシア軍は出費した。

山もカネ次第。半年前には雪も見なかった人が、雪と氷の世界に飛び込んで8848mの頂を踏んだのです。

アナトリエ・ブクレエフ（1958～1997）という登山家の死

カザフスタン出身 ロシアの登山家

ロシア国籍を持つがカザフスタンのアルマティに居住。ソ連高所登山学校のハードなトレーニングと独特のグレード・システムで鍛えられた登山家の一人。

登攀クロニクル

- 1980年代 コーカサス 天山山脈の5000m～7000m峰に登頂
- 1982年 エベレスト南西壁登攀のソ連隊に参加
- 1989年 カンチェンジュンガ山群8000m、四つのピーク縦走に成功。ソ連隊隊員として
主峰8586m 西峰8505m(ヤルンカン) 中央峰8478m 南峰8476m
- 1994年 マカルー登頂(ソア・カイザー隊・米・公募隊ガイド)
- 1994年 ダウラギリ登頂 グルジア隊に参加 隊と分かれて単独登頂
- 1995年 マナスル登頂 カザフスタン隊に参加
- 1995年 エベレスト(公募隊ガイド)ローツェ シシャパンマ チョ・オユーと
半年で8000m四峰に連続登頂
- 1995年 エベレスト登頂(インドネシア隊ガイド)
- 1995年 アンナプルナで滑落死

1991年バルト三国独立後のソ連邦の政治と経済の混乱。この国家体制の変化でソ連の登山家を取り巻く環境は大きく変わった。ソ連邦時代、国の庇護で生活できた登山ガイド、登山指導者の立場は失われた。アフガン戦争での徴兵を忌避し、職業訓練も受けず、登山しか取り得のないアナトリエ・ブクレエフは、西側諸国にガイドとして雇用され生計を立てる道を選んだのです。国家の庇護が失われたことがもたらす絶望感と惨めさはブクレエフ自身が身にしみて知っていた。1994年マカルー登頂を成功させた後、同じ隊で登ったアメリカ人が飛行機に乗ってさっさと帰国していくのを横目に、彼は登山用の装備を売り払ってアルマティまでの旅費をかきあつめなければならなかった。

彼は海外の遠征隊に雇用されたとき「体重が増えた」と言っている。登山食でも国に居たときの食事に比べて豪華な内容だったのだろう。

エベレストの悲劇で、マウントマッドネス隊の筆頭ガイドだったブクレエフは高所で顧客を置き去りにしたと非難された。

この非難に反論したブクレエフの著『デス・ゾーン』では、ソ連人だったブクレエフには営業登山のサービスの本質が、どうしても理解できなかったとある。

悲劇のエベレストから下山した彼は故国のカザフスタンに帰ったが、'96年秋に再びカトマンズにやってきた。ここで彼は友人のシェルパ、アン・ツエリンと会ったとき、翌年春にエベレストを計画しているインドネシア隊の相談役にならないかと持ちかけられた。公募隊に雇用されたガイドでなく彼自身が隊を組織し指揮する立場を与えられたのです。1997年4月26日、インドネシア軍の兵士アスミジオノを登頂させた時、エベレスト「登らせます」という契約で、彼がいかほどの報酬を得たのか不明だが、1996年マウントマッドネス登山隊の筆頭ガイドとしての報酬、\$ 25000を大きく超えたのは確かだ。

ブクレエフは自らが公募隊を運営しそれで生計を立てることを考えた。

だがソ連の高所登山学校で鍛えられたアルピニストにとって、引率登山で生計を立てることは彼にとって不本意な生き方だったに違いない。山に登山者を合わせるのではなく、頂上までの切符を買った顧客に合わせて山に登る、という公募登山のサービスを理解できぬ彼に、公募隊の経営は無理だった。

もうヒマラヤへの出稼ぎなど止めて故国のカザフスタンで平凡に暮らせばよかったのに。

根っからの山好きだった彼は1997年12月、本来の自分に還れる場を求めて挑んだアンナプルナで冰雪雪崩に撃たれ、ガイドとしてでなく登山家として死んだ。

エベレストより高い山

幻の標高アムネ・マチンの伝説は、1921年に英国の探検家ベレイラ准将が行った壮大な旅に端を発する。その旅は北京、チベット、インド、ビルマ、中国南部を回って、再び北京に戻ってくるというものだった。ベレイラは旅の途中で亡くなるが、1923年、彼は雲南省でたまたまジョセフ・ロック（植物学者）と出会い、その際、自分がエベレストより高いはずだと確信しているアムネ・マチン山群の巨大な山について語った。

1929年ロックは困難な旅の末にアムネ・マチンへたどり着くと、約10キロ離れた場所から山の高さを測る。コンパスによる測定と水の沸点を利用した標高計算。ロックはアムネ・マチンの標高をエベレストより152m高い、9000mと結論づけた。アムネ・マチンの標高に関する憶測は、その後約20年休止状態にあった。

1944年ビルマから重慶に物資を運ぶ飛行機が途中嵐に遭遇し、アムネ・マチン山群付近で、高度9300mの雲の層から上へ抜けだした — 飛行機の高度計は間違いなく機能していたとパイロットは言う — ふと上を見ると飛行機より数十メートル高いところに雲の屋根から顔を出した峰が見えた。

「この山はエベレストより高い！！」パイロットは基地に帰着後、記者団にその目撃の様子を

語った。しかしこの話は全くのデッチアゲ。そもそもこの飛行機の飛行高度は9300mに及ばぬ性能だったのです。

1949年レナード・クラークと言う探検家が、中国の道路局から借りたあまり精密でない経緯儀を持ってアムネ・マチンの麓へ行き三角測量を行った。

結果は9041m。彼は断言した。「私はまちがいなく世界で一番高い山を見つけたと信じている」

この時アムネ・マチンの山頂には雲がかかり瞬時の晴れ間に行われた測量は、ただの1回。測量は3回以上の平均値という定めは無視された。

ジョセフ・ロックといいクラークといい「驚くべき数字をはじきだす熱意」が、アムネ・マチンの伝説を守ったのです。

多くの登山愛好者に夢とロマンを与えた幻の山の結末は、1970年代に行われた中国政府の精密な測量によって、標高6282mと言う平凡な高さであることが分かったのだ。

ヒラリーとテンジンは ほっと胸をなでおろしたに違いない。

『アムネマチン — 謎の山』レナード・クラーク 1974 他に依拠

1981年、アムネ・マチンは日本の上越山岳会が初登頂した。何しろ人気の山、登山料はいかほどだったのでしょう。報告書には諸費用込み51,000元（約700万円 — 1980年のレート）とある。この諸費用、6000m峰としてはかなり高額で、登山料に限ってはエベレストに肩を並べている。

エベレストに関する 謎二つ

1924年頂上付近で姿を消したマロリーとアーヴィン。最後に二人の姿を見た仲間は、望遠鏡の視界から二人の姿が消えた地点はセカンドステップの上部であり、登頂した可能性があるという。マロリー達が世界初の登頂を果たしたか否かは謎のまま。二人は果たして頂上に達したのか……………。

彼らが消えて75年、1999年5月にエベレスト北面8160m付近でマロリーの遺体が発見された。世間の関心は1924年登頂の証拠発見に期待高まったが、残された手帳、カメラに登頂に関する記録は見つからなかった。いかなる記録でも発表されなければ記録として認められない。だから登頂はなかった、となるのだが、登頂したかも知れぬ というマロリー家族の思いを奪ってはならない。ここは謎のままとしよう。

第二次大戦が終結し世界の大国はその国威誇示を世界一の高峰に向けました。1952年、つまり英国の1953年エベレスト初登頂の一年前、ソ連の北側からのエベレスト遠征では、8230m付近から頂上攻撃にでた隊員が行方不明になってしまったといわれています。

しかしこの遠征の公式報告はなく、ソ連山岳連盟は1952年の遠征を公式に否定している。遠征があったのか、無かったのか。あったのになんらかの理由でもみ消されたのか。

1952年の遠征は —— 深田久弥の記述を引用します。

1952年秋、ソビエトの登山隊が北面からエベレストに向かった。36人のそれぞれの専門家を含む一行は、5機の飛行機でラサに到着し、そこから山麓に達した。6人の頂上アタック隊は、8230メートルまで大した困難もなく登ったが、それ以後消息を絶った、と伝えられている。しかしこれについてソビエトは何も発表していないので、確実なことはわからない。（「ヒマラヤの高峰」第一巻・深田久弥）

深田はこの記述の出典について何も触れていない。なんの根拠もなしに書けるわけがなく、どのような情報に拠（よ）ったのだろうか？

……と伝えられている、とあるが、誰が伝えたのか？ 風聞か。

1952年の遠征が失敗したという報道は、イギリスのメディアが意図的に流した嘘情報（通俗新聞のガセネタ？）との説もある。

だがこの説にはデッチアゲ報道を流した発信元、その意図はなんだったのかに関して、なんの説明もない。深田はこの記事を知っていたのか。知っていたとしても、記事の信憑性に確信がもてなかったから、ソ連のエベレスト遠征に関して、その出典を明らかにしなかったのか。

書き出しは36人のそれぞれの専門家を含む一行は、5機の飛行機でラサに到着し、と具体的数字を列挙して事実と思わせるが（これもガセネタに拠ったのか）、途中から曖昧な表現になり、……「確実なことは分からない」で終わっている。

ここから本当半分、推量半分の話としてお読みください。

第二次大戦後、大国の国威誇示は人工衛星にあり1966年、ソ連は大空にロケットを発射し地球は青かったというガガーリンの言葉で、世界にその力を示しました。この開発費用に比べてエベレストの遠征費用などしれた金額であり、ソ連には英国が唾つけたエベレストに先乗りし、かつてグレートゲームのライバルだった大英帝国の鼻をあかす野心があったと思います。

1950年当時、アルピニスト育成を目的としたソ連の登山学校に、中国から登山家が派遣され登山技術の研修を受けていたこともあって、中ソ山岳界は緊密な関係にありました。

政治の世界でも1950年に成立した中ソ友好同盟相互援助条約もあって中ソは友好関係にあり、加えて1951年、中国がチベットを占領しエベレスト北側からの接近が可能となって（ネパールの登山許可不要）、エベレストへの道が大きく開かれたのです。

当時のトップ毛沢東はスターリンが嫌いでしたが山の世界に政治は介入せず、ラサ空港の使用、ラサからロンブク迄の車手配等に中国の協力もあった。

英国に押し切られた上海租界（治外法権の外人居留地）、香港租借の屈辱は中国人の心に刻みこ

まれており、中国はソ連のエベレスト計画を歓迎したでしょう。

さらにソ連にはハードなトレーニングシステムと独特のグレード・システムで鍛え抜かれた登山家が多数存在し、大規模な遠征隊を組織することは可能で、このこともエベレスト遠征計画を後押しした。

このソ連山岳連盟につながりある人物がエベレスト遠征を画策し、ことを実行した。

当時のトップ、スターリンは1953年3月に死亡しており、遠征を認可できぬ健康状態にあったと推測します。期待に反して遠征は失敗に終わり、その認可の責任追及を懸念した人物が遠征事実をもみ消した。ロシアと中国、長老の生き証人のどなたか。

この疑念にお返事、いただけませんか。

8000mの縦走 ヴォイテク・クルティカ と イエジ・ククチカ の2人組

1986年ブロード・ピーク北峰（7550m）— 中央峰（8016m）— 主峰（8047m）までをたった二人で6日間で成し遂げた完全縦走は、登山史に残る極限的登攀行為です。いくつかの山を連続して登る縦走は、独立峰登山にくらべて心身負担が何倍も厳しい。単にひとつの山に登るだけならその頂上に達した時点である程度の力を使い果たしていてもかまわない。下山ルートは確保されているし、難所には固定ロープが張られていて安全だ。一度歩いたルートを下山するという心理的安心もある。だが縦走はそうはいかない。常に未知を進まねばならず加えてひとつのピークに力を使い果たしたら、次のピークに進めない。余力を残してピークを踏んで行かねばなりません。

イエジ・ククチカは、14座を最短8年で達成し、そのうち9座は新ルート、2座は冬季という20世紀最高の登山家でしたが、惜しいことに1989年、未踏のローツエ南壁8200mで転落死。41歳でした。

ピッケルなしの8000メートル

ナンガ・パルバート

1953年、ナンガ・パルバート。疲労の極で頂上に達したヘルマン・ブールは、パキスタンとチロルの小旗をつけたピッケルを頂上に置いて下降にかかる。身を支えるのはスキーのストックだけ。時刻は夕方7時ごろ。途中でアイゼンの紐が緩み靴からはずれたアイゼンの片方が暗闇の斜面に消えた。ここでビバーク。ピッケルなし、アイゼン片方なしでベースキャンプに下山した。

1999年、日本人登山家・池田壮彦氏がナンガ・パルバートでブールが残したピッケルを見つけ、ブールの未亡人オイゲニーさんに届けられた。

ブールの苦闘を語るピッケルは、オーストリア山岳博物館に収蔵されている。

チョ・オユー

1954年、チョ・オユーの初登頂を果たしたヘルベルト・ティツチー(オーストリア)の一回目のアタックは天候悪化で引き返し。その後天候に恵まれず最終キャンプで長い停滞を余儀なくされた。その間に彼の両手と両足の凍傷が進み自分で靴紐を結ぶこと、ピッケルを握ることも出来ぬ状態になった。再度の頂上攻撃を目指したのは、ティツチー、ゼップ・ヨヒラー、パサン・ダワ・ラマの三人。彼らの様子はこうだ。

頂上攻撃の朝、仲間がティツチーの足を無理やり靴の中に押し込み、アイゼンの紐を締め上げ出発の準備が出来上がった。ティツチーはオーバー手袋の手の平側にストックを括りつけ(指は伸ばしたまま)ピッケルは持たず(握れない)、岩が露出した急場の固定ロープは掴めないの、シェルパのパサン・ダワ・ラマがザイルを取りだして、二度、三度と彼を引っ張り上げた。

その時アイゼンの紐が緩んだが、そのままではいなくなる。ゼップ・ヨヒラーは始終靴をピッケルでたたき凍傷の痛みに耐えていた。三人は難所を乗り越えた。

チョ・オユーの頂上付近はただ広い雪原のなかに頂上近辺がわずかに盛り上がっている、という地形になっている。どこをどう登っても危険はなく8000m峰ではもっともやさしい山とされている。

三人は勿論アンザイレンもせず、ティツチーは装着が緩んだアイゼンで、ずるずると雪面を引きずりながら、登るというよりはただ歩いていただけで頂上に達した。

第二次大戦終結後の8000メートル

ここは国際外交を語る場ではないので8000m、山の世界に限定した話とご了承ください。

第二次大戦の終結で生じた戦勝国と敗戦国は、8000mでどのような登山を展開したのでしょうか。

戦後まもなくフランス山岳会はヒマラヤ遠征の組織作りに乗り出し、いくつもの遠征隊を次々に送りだし高い成功率を示した。機は熟し1950年アンナプルナ遠征が実施され人類初の8000mの頂を踏んだ。この遠征の中心人物はモーリス・エルゾーグ。彼は後にフランスのスポーツ大臣になった。

この遠征が当初目指したダウラギリ(8167m)は偵察の結果とうてい無理と判断し、偵察途上で眺めたアンナプルナに転じたのです。

1950年というヒマラヤに関して情報不足の時代に為されたこの8000mは、他の国の登山家に大きな刺激を与えたに違いない。

1952年にあったかもしれぬソ連のエベレスト遠征は、西側諸国への対抗心。

1953年、英国のエベレストは、大英帝国の伝統誇示。ドイツ隊のナンガ・パルバートは、ゲルマン民族の身体能力、優位を立証した山。

1954年K2に初登頂し帰国したイタリアの遠征隊は、前年(1953年)に米国隊の劇的な敗退の翌年という背景があり、ジェノバで四万人をこえる大観衆の熱狂的歓呼に迎えられた。戦争では負けたが山の世界では米国に勝利したのです。

1956年、日本隊はマナスルに登頂し山の世界で先進国に仲間入り、国内に登山ブームをひきおこす。

1960年、ダウラギリに初登頂したスイス隊は、5200m地点まで『イエティ』というニックネームのポーター機を使用し隊員と多くの荷物を運びあげている。

1964年、中国は他国に登山許可を出さぬ「とりおきの山」として残された世界14位の8000m級未踏峰、チベットのシシャパンマに初登頂し面目を保った。

1980年代、人工衛星や軍備強化に余裕のない東欧諸国は、国家体制で登山を支援し、資金と休暇に心配無用の超人的登山家、ククチカ、クルティカ達の活躍で、山の世界では大国を凌駕した。

1982年、ソ連隊はエベレスト南西壁登攀で、国防と結びつき発展してきたスポーツ・アルピニズムの力量を実証する。

1989年、ソ連隊のカンチェンジュンガ山群8000m、四つのピーク縦走は、隊員30名、シェルパ17名、有酸素と、1980年代では、人・モノ・資金で最大量を投入した大遠征。ソビエト連邦時代に国家の支援があったスポーツ・アルピニズムの成果を結実したが、同時にソビエト連邦時代アルピニズムの最後を飾る遠征となった。

8000m — 商業公募隊の誕生

商業公募隊 — 登山を営利の対象とし、頂上までの切符を買った登山客の登頂支援を業務とする組織。

8000m最初の商業公募隊は、1980年のダウラギリとされている。1960年、この山はスイス隊が初登頂したが(K・ディーンベルガー他5人が登頂)そのときの隊長・マックス・アイゼリンが「ダウラギリ初登頂20周年記念」と銘うって催行されたものである。

エベレストについてもアイゼリン・スポーツが1986年9月に公募隊を組織し、ヨーロッパ各国から25人が16人のシェルパにサポートされて南峰(8748m)まで達している。1990年ごろからベテランガイド(登山家)が商業目的で組織する隊が世界各地から登山客を募集し、1993年の米・英・ニュージーランド各国の商業公募登山隊のエベレストでは、ネパール側だけで81人が登頂。特に5月10日は一日で40人が登頂している。

大戦終結して六十余年。いま、国家や民族の背景など考える登山者はなく、「ヒマラヤ・七大陸。登らせます」の商業公募隊は、どこの国の人でも大歓迎の時代となっている。

8000m — 非商業国際公募隊

各国の山岳会などによる大型遠征隊が激減する時代となり、8000mに登りたいが自分では隊を組織できない登山家たちが、雑誌やウェブで広告して仲間を募り遠征する「非商業国際公募隊」が8000m登山の手段として現れた。ヒマラヤ現地で知り合った登山家たちが、登山料や資材運搬費の頭割りを図るためネットを通して連絡を取り合い名目上の隊を組織するケースもある。例えば7人で1隊と申請して3人と4人がそれぞれ別行動をする、または隊の支援を一切受けない条件で別行動ソロというケースもある。竹内洋岳の14座では、そのうち12座が各国の登山家と少人数の国際隊を組み登頂している。

余談として — 「十四座 と 七大陸最高峰」

話題提供の山としてメスナーが考案し、完結した十四座登頂(1986年達成)は、その発想と一回性の価値に最大の面目ありで、登山史に名を刻む。以後十四座達成は一流登山家の勲章となり、多くの登山家が勲章をぶら下げています。十四座は高嶺の花、七大陸なら手が届くとテキサスの大富豪ジャック・パスが、1985年エベレストに登頂して、七大陸最高峰登頂を達成。

メスナーはオーストラリアの最高峰コジオスコ(2228m)は、頂上近くまでリフトがあり登山の対象にならない。オーストラリア大陸も七大陸に含まれると主張し、その最高峰カルステンツ・ピラミッド(4884m)に登頂して、メスナーの七大陸を達成。

1990年代、商業公募登山が七大陸のハードルを下げ、多くの登山者(客)が、セブン・サミッターの肩書きを取得している。

8000メートルをめぐる変遷

ナショナリズム、セクショナリズムが登山に介入した8000mの初登頂競争。

エベレスト、マナスルの大名行列登山は昔の話となって、個人の山が主流となり1975年、メスナーとP・ハーベラーは、取り付いたら登りっぱなしのアルパイン速攻でガッシャブルム登頂。8000mは極地法という従来概念を打ち破った。

1984年、クルティカ と ククチカのブロード・ピーク 縦走(北峰—中央峰—主峰)、メスナー隊のガッシャブルムⅠ & Ⅱ 峰縦走は、アルパイン速攻による8000m縦走への道を開く。

1989年、ソ連隊のカンチェンジュンガ山群8000m、四つのピーク縦走は、20世紀のヒマラヤ登山史を飾る金字塔。今後これを上回る記録は難しい。

1990年ごろから8000mはビジネスの対象となり、商業公募隊の支援を受けた登山客の登頂が多く現れる。

いっぽうで21世紀に現れる話題性の登山 — 最短期間の14座達成。最高齢、最年少の8000m登頂などは、テレビ中継や新聞、雑誌で大きく報道されるでしょう。

この報道の陰に埋もれたアルピニズム実践の山は、ウェブサイトで知るしかありません。この報

道格差さびしいです。

話題性に背を向けて、A・F・ママリーが提唱したアルピニズムを追求する登山の究極は、少人数アルパイン速攻の8000m縦走です。

いま商業公募隊の8000m、竹内洋岳、栗城史多のネット中継登山と、ビジネスがらみの登山にカネが集まる。山は昔のままだが、登山の背景は変わった。

このような状況で資金と休暇に制約多い登山者が、残された登山界の課題、8000m縦走に挑戦する。彼らがいて始めて登山界は成り立っていく。

このアルピニズムを継ぐ者を応援したい。

あとがき

このエッセイの冒頭・三編は新聞記事に、それ以外は本に依拠しました。

いまインターネットにある膨大な登山情報を見ると、もはや登頂記などは紙に書く意味がない時代となっています。この稿作成にあたり、日本人のここ10年間の8000mをネットで調べたら、そのうち新聞、雑誌で大きく報道されたのは、三浦雄一郎のエベレスト、竹内洋岳の14座で、この二人以外の8000m登頂者はニュースにならず、遭難事故のベタ記事で、死んだ人だけがニュースになっていたのが報道の現状です。

誰でもよいが、例えば石川直樹のブログ。ラッセル・ブライス(Russell Brice)のエベレスト・ニュース。ネパールの登山データをまとめた、カトマンズ在住のエリザベス・ホーリー(Elizabeth Hawley)などのウェブサイトを開いてください。ここにある記事でヒマラヤの登山情報が分かります。

書き手も読み手も取材する気のない紙媒体を相手にせず、逆に言うならヒマラヤ登頂などのニュースは、もう新聞や雑誌にとって報道価値がないのです。

ウェブにあった8000m登頂は、その登山の行動詳細が分からないので、「山名、何年、何月、登頂、人名、国名」としか書きようがなく、これでは『時刻表』と同じで読み物になりません。

グーグルで未知の領域を探索し、未踏の山のリアルな3D画像をとりだした場合はどうでしょう。好奇心を満たす以上の何かを感じるでしょうか。

2001年、訪れたシムシャール峠をグーグル画像で再現した。

あのとき風はパミールとカシミールから峠に吹き、雪の峰と向き合った丘に座り込み、眼下に見たキッチンテントや羊が草食む情景は、今も心に刻まれている。

再現した画像からは音や風、雪や大地の触覚、動物や草木のにおいなどは感じない。

グーグル画像は実際の現場で感じる事象や情景を伝えるものではありません。

山を考えた時代に上梓された、エルゾーグの「処女峰アンナブルナ」ハントの「エベレスト

登頂」メスナーの「チョモランマ単独行」ボニントンの「現代の冒険・上」などの本が、情報伝達の主役だった時代は遠く、山を考える事に意味がなく、したがって山を考えた本の刊行もなく、インターネットの中にあふれかえる登山記録。グーグルマップ、GPS、通信衛星と高度情報社会が登山に組み込まれたとき、本や文献で美しい文章に触れ、見知らぬ世界に夢とロマンを馳せたあのころの山は、もう過去のものになったのだという実感を、感慨とともに感じています。

2012年11月

ヒマラヤの登山情報については、関西学院大学山岳会・南井英弘氏に以下の資料を教示いただきました。お礼申し上げます。

AAC が Elizabeth Hawley さん収集のデータを纏めた 'The Himalayan Database' by Elizabeth Hawley を2005年に発行。その後2009年までのデータを纏めた'Himalaya by the Numbers' の本は上梓されていないが次の URL: www.himalayandatabase.com で検索できます。

On Top of the World The New Millennium: The continuing Quest to Climb the World's Highest By Richard Sale, Eberhard Jurgalski, George Rodway Snowfinch Publishing 2012年:248ページ。

アンナプルナから登頂された順に配列。夫々のピークの写真の上に赤、黄、緑などカラーで登攀ラインを記入。著者は2000年に On top of the Worldを発行していたが、その後の10年間のヒマラヤ登山に大きな進展があったのでその捕逸版として発行。高峰毎にノーマルルート、バリエーションルートでの登攀データー・一覧表があります。



— 追 悼 —

訃報・塩野良之助様

越 田 和 男 （昭 36 理）

先日届いた同窓会誌「甲窓」の最新号の追悼欄で塩野良之助さんのお名前を見つけたので、ご報告方々私の存じ上げている塩野さんにつきご紹介させていただきます。

塩野さんは旧制 18 回理科（戦時体制で昭和 17 年 9 月繰上げ卒業）から阪大理学部に進学。物理学者として、永く米国ピッツバーグ大学の教授をなさっていました。確か昭和 30 年代の海外への頭脳流出例として、そのお名前を何かの雑誌で拝見した記憶があります。

古い山岳部の「時報」では、終戦後の一時期の山岳会の催しに顔を出されていたとの記録もありましたし、阪大OBの大島輝夫さんからお聞きした話では、戦後の日本山岳会の関西支部の復活に際して、十人からなる委員会の委員としてご尽力されていたとのことでした。

私は、今から 20 数年前、ピッツバーグに出張の折、同期の茂木光隆さんに電話番号を教えてもらい、ご自宅に電話を入れてお話させていただいたことがあります。なかなかお出にならないのでお留守かと思い、諦めかけたタイミングに、庭の手入れ中だったとかで、息を切らせてお出になりました。山岳部のことを大変懐かしがられ、お会いしたいとお誘いでしたが時間がとれず、次回に是非といつて失礼したのを思い出します。ご夫婦で日本からの留学生のお世話などもなさっていたようです。

また、数年前には、大島輝夫さんが、ピッツバーグで塩野さんにお会いになり（注）、甲南山岳部の事をことのほか懐かしがっておられた由、JACのルームでお聞きしたこともあります。この時、「山嶽寮」を是非送ってあげてはとのことでもあったので、井上君に頼んでバックナンバー数冊を送ってもらったのでした。

弟さんの池田（旧姓塩野）喜久夫さん（旧制 21 回理科）も山岳部で、以前大阪の梅田でトリス・バーをやって居られた時には小川守正さん、川崎厚二さんら色んな方が出入りされていましたね。甲南山岳部の同期の方々はお元気だった茂木さんを始め、津田昌男さん、国府三郎さんも既にお亡くなりになっており寂しき限りです。ご冥福をお祈りする次第です。

（注）『昨年 5 月に仕事で米国ピッツバーグに行き、理学部化学研究室の先輩で、ピッツバーグ大教授をしておられた塩野良之助様（理 45）にお目にかかりました。お元気です。塩野様は甲南山岳部OBで、戦後、日本山岳会関西支部復興にも尽力されました。関集三先生（理 38）もお元気です』 大島輝夫

大阪大学山岳会会報 No. 10

2008 年 6 月 より（編集）

訃報・熊谷 治様

熊谷さん(旧制 19 回文)のご長女より下記連絡がありましたのでお知らせいたします。
(事務局 井上知三)

永らくお世話様になりありがとうございました。父 熊谷 治は昨年 平成 24 年 11 月 12 日に永眠いたしました。これまでのご厚意に感謝致します。

故 熊谷 治 長女 熊谷昌美

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞



昭和 15 年夏の涸沢

(福井實氏所蔵)

後列左から	津田昌男(尋 4)	北川隆一(尋 4)	国府三郎(尋 4)	
中列左から	福井實(高 1)	塩野良之助(尋 4)	島良之(OB)	不明(人夫?)
前列左から	小川守正(高 1)	熊谷治(尋 3)	高倉達雄(尋 3)	赤松二郎(OB)

(尋)は尋常科の略で中学に相当 (敬称略)

— 会員短信 —

平成24年 秋

平井 一正 (名誉会員)

元気にやっておりますが80の坂はしんどいです。

神戸 謙司 (中高顧問)

長らくのご無沙汰で申し訳ありません。「秋の集会」ご盛会をお祈り申し上げます。中高山岳部も昨年、高校3年が卒業し、活動部員がいない状況です。活動報告できず、誠に申し訳ありません。

赤松 二郎 (旧14理)

二年続けて夫婦でお世話になりました。皆様に宜しくお伝え下さい。

小川 守正 (旧17理)

戦争末期から長く続いた混乱・食糧難・資金難・学制改革などによる困難をよく乗り越えて今日の山岳部・山岳会をつくり上げた新制の方々に心から感謝と敬意です。おかげで私も90歳を迎えることができました。あと5年くらい頑張り、部と会の発展と皆様の健康を祈ります。

小林 誠 (旧17理)

三年前に脳梗塞を患い、自宅療養中です。

伊藤 長次郎 (旧21理)

元気なつもりでも、連日の暑さに少々まいっています。

伊藤 五介 (旧24文修)

元気にやっています。

中井 久夫 (新高27)

とりあえず介護付き有料老人ホームに入居しました。

北方 龍一 (新高30)

後期高齢者になり今年の猛暑はこたえます。相変わらず、太陽光発電で兵庫県のコンサルとして県内に出張しています。

平井 吉夫 (新高32)

甥の結婚式と重なるため残念ながら出席できません。この会が末永く続く事を念じております。

竹原 佑爾 (新高33)

先日、中国四川省成都から楽山、峨眉山、九寨溝、黄龍へ旅しました。3500～4000mの所もあり、簡易酸素ボンベを持たされての散策でした。成都是高層ビル、高速道路、地下鉄、飛行場等々建設ラッシュで圧倒される思いでした。ちっぽけな井の中で政争に明け暮れる日本は早晚、吸収されるのでは……。

山城 國暉 (新高36)

所用のため、欠席させていただきます。皆様に宜しくお伝え下さい。

乾 恵美子 (乾 卯兵衛) (新高37)

今年は慰霊祭が雨で中止になり、残念でした。そのためか、秋の集会のご案内を頂きありがとうございます。夏には久しぶりに小屋泊まりで蝶ヶ岳に登り、好天に恵まれ、山々を見渡す事が出来ました。10月の連休には、丁度、木曾駒の紅葉を見に元気しております。秋の

集会のご盛会をお祈り申し上げます。行く予定です。もし、時間があえば、覗かせて頂くかも知れません。

小原 耕治 (大31 経)

酷暑に喘いでいますが、まずは元気です。皆様に会えるのを楽しみにしています。

木全 実 (大32 経)

体調悪く、入退院を繰り返しております。

砂川 彰雄 (大32 経)

夏、秋の3シーズンは概ね高遠で過ごしておりますが、山は眺めているだけで登ろうとは思いません。なさけないことです。

宮本 侑 (大32 経)

元気にしており、是非出席したいのですが、どんな乗り物でも、長い時間乗っているのは、腰にこたえるため、欠席となりますのでよろしく。

雨宮 宏光 (大33 経)

この案内を頂いた時、涼を求めて伊那松川町の別荘で昼寝ばかりで過ごしていました。何冊か持ち込んだ本一冊も読まず、高校野球を見て、ゴロゴロ。多くの会員が参加されるよう祈っています。皆様には再会を楽しみにしています。

鈴木 頼正 (大33 経)

皆様には再会を楽しみにしています。

田辺 潤 (大34 経)

会社勤めが無くなりましたので、何かをしなければ、と考えていますが、その「何か」を見つけれずに居ます。10 月に海外旅行でしようと考えておりましたが家内の母親の状態が

悪く、それもお預けです。元気にしております。

芦田 匡平 (大35 理)

秋の集会は親父の命日と重なり、つい、行きそびれています。特に、今年、命日に墓参りに行くと、僕は親父より5日長生きしたことになります。親父の誕生日が4月28日、僕が23日だからです。お袋を越えるにはあと19年を要します。さてさてと、とにかく、健康第一で!

伊丹 弘忠 (大35 経)

元気にしておりますが、腰の調子が悪く、乗用車での長時間の乗車は苦痛ですので、今回も欠席します。

鳥居 威男 (大35 経)

元気で毎日、六甲の麓まで散歩。今回、先約があり、失礼します。皆様に宜しくお伝え下さい。盛会をお祈りします。

越田 和男 (大36 理)

体力、体調、懐具合に見合った山見遊山を続行中です。日本山岳会の図書委員会の他にパミール中央アジア研究会という会の仲間に入れてもらって、同好の方々と交遊を楽しんでいます。

伊藤 久三郎 (大36 経)

御無沙汰しております。 毎日病院へ行っております。皆様に宜しくとお伝えください。

牧野 宏 (大36 経)

ご案内ありがとうございます。当日、所用でき、誠に残念ながら欠席します。

田中 孜 (大36 経)

「秋の集会」で皆様とお会い出来る事、楽しみにしています。

廣瀬 健三 (大 36 経)

暑かった夏もテニスやPOOL通いで元気に過ごしました。今月末には予てから行きたかった丹波の白髪岳(しらがだけ)に行く予定です。

藤安 賢一 (大 36 経)

ようやく癌との闘いからは抜けましたがパーキンソンが居座り、現在、要介護 2 のレベルです。杖を頼りに保久良までは行っています。

大関 和夫 (大 37 経)

6 月に退院。この夏はおとなしくしていました。山仲間と会うのが楽しみです。関西からも来てくれます。何とか生きています。

二谷 和成 (大 38 経)

年々、体力低下を感じています。ほとんど歩かないで済む近くの低山を月に 1〜2 回行っています。

村上 与利一 (大 39 営)

10 月 8 日は仕事あり、欠席です。

森本 全彦 (大 39 法)

元気にやっております。70 歳を過ぎるとこれ程体力が落ちるのかと思い知らされております。上り下りがしんどくなってきて、水平歩行へと。滋賀県の中山道や東海道を歩いたりしています。

福田 信三 (大 39 理)

山獄寮 67 号は予定通り発行することができました。原稿をお寄せいただいた皆様にお礼を申し上げます。ご盛会をお祈りいたします。

伊丹 徳行 (大 40 法)

当日は 2 週間かけて、四国八十八か所を 4 年に一度の逆遍路をしておりますので失礼します。

鵜木 洋 (大 40 文)

毎日のんびりしています。

井本 洋 (大 40 理)

古希を迎え人生最大のピンチに直面しています。私の人生の中で山岳部に在籍した事が生きざま、価値観に大きく影響を与えました。何年か振りに皆様の顔を拝見し、元気を頂きたいと思います。

横山 嘉壽子 (横山 洋) (大 41 法)

ご案内頂き有難うございます。他の予定が入っておりましてお伺いできませんが、次の機会にはと娘夫婦が申しております。又、どうぞ宜しく願いいたします。

柏 敏明 (大 41 経)

8 月に安井さん、水渡さんの三人で海老名の大関さん宅にお邪魔してきました。もうお元氣になられ、美味しい天ぷらそばを作って頂きました。美味しかったです。秋の集会は、丁度、ヨットで屋久島を目指している頃ですので、残念ながら出席できません。ご出席の皆様宜しくお伝え下さい。

赤田 正和 (大 44 理)

9 月 14 日〜15 日、那智勝浦の社有林に行きました。問題はいかに安く丸太を搬出するか、同時に需要です。両方に注力しています。竹中工務店様にもフェスティバルホール(新築)で使ってもらっています。これからは街中に木材を使用することを PR しています。そのことが山林(国土)を再生します。皆様に宜しく!!

石原 浩二 (大 45 理)

時々、山に登っています。皆さんとの再会が楽しみです。

矢吹 操 (大 45 理)

元気です。休みの日は義母の看護で自由な時間がなかなか取れません。健康維持のつもりでしていたジョギングもちよっと休憩と言ったところです。いつも、御案内ありがとうございます。

南里 章二 (大 45 理)

生憎、学校行事と重なり参加できません。皆様によりしくお伝えください。夏は北欧、ギリシャを中心に一か月旅してきました。アルプスが海上に飛び出したようなフィヨルドの光景が素晴らしかったです。最北のノールカップまで行きました。ギリシャは 40 年前に三泊四日のエーゲ海クルーズで行ったところを二週間かけて島めぐりをしました。物凄い数の観光客でギリシャ不況はどこ吹く風という感じでした。

伊藤 辰之 (大 45 営)

卒業以降、山にはほとんど行っていません。最近、アルバムを整理し、パソコンに入れました。S41～S48 甲南山岳部にいました。当時の写真(リバーサルフィルム)で撮影したのがたくさんあり、又、山日記もつけていたので投稿したいと思います。浪川先輩の写真を見て感激しました。

井上 知三 (大 48 文)

二年ほど前から山行きの道具を少しずつ購入し装備も揃ってきたので、最近山歩きに同行してもらっている松下さんと、8 月に学生以来 38 年ぶりに上高地より岳沢―前穂―奥穂―

涸沢とテント泊で天候にも恵まれた北アルプスを満喫してきました。私も含め中高年と山ガールの多さには驚きました。また一つ楽しみが出来たような気がします。秋の集会の前に何処か山歩きの後、秋の集会に参加したいと思っています。

平井 幹男 (大 50 文)

残念ですが都合がつかず欠席します。ますますの盛況を祈っています。

中澤 章浩 (大 51 文)

例年、この時期は秋祭りの最中で出席不可能です。今夏、久し振りに表銀座を登ってきました。軽装故に軽快に歩けました。皆様にどうぞ宜しく。

西村 清 (大 51 経)

すっかり山と縁遠くなりました。? 年前に諸先輩に連れて行ってもらった年末のスキーツアーが懐かしいです。

大柳 (吉松) 香代子 (大 51 法)

親の介護生活の日常ですが外出しづらい状況の中、山行きを実現すべく、G5. 13 を乗り越えています。ゴールドデンウィークにネパール、バラボカリ尾根に初めて大名トレッキング。マナスル三山とシャクナゲのシャワー。8 月お盆、初スイス。グリンデルワルドに一週間、ヨーロッパアルプスの醍醐味を満喫。夫君がメンヒ、アイガー登っている間に勝手気ままにハイキング三昧。

大森 雅宏 (大 53 文)

まずまず元気になっています。相変わらず「役場のおっさん仕事」です。定年まであと少し。居心地の良い老後のため、家庭サービスを模索

中です。今から間に合うか、どうでしょう？

住友 健時 (大 55 法)

インドネシアのバリに住んでおりまして日本におりません。

山本 恵昭 (大 56 理)

最近忙しくなかなか時間が取れませんが、なんとか月一回は山に出かけるようにしています。

川野 幸彦 (大 56 理)

皆さん、お元気ですか？10 月から東京に転勤となります。単身赴任です。盛会となりますように！皆さんに宜しくお伝え下さい。

今井 啓介 (大 56 経)

今夏、父が亡くなりました。通夜には大森さん、川野君、山本君が来てくれました。有難うございました。91 歳でした。

八木 健 (大 58 経)

毎回のご案内ありがとうございます。次回こそは参加しようと思いつつ今回も欠席で申し訳ありません。盛會を御祈念申し上げます。

東 哲也 (大 59 理)

網干の川沿いに移りもうすぐ2年になります。自然多くのどかな所です。今年も 10 月には涸沢か、立山ヘテント担いで紅葉登山の予定です。山行の数は減ってきましたが海に山へと忙しく遊びまわっています。

藤井 琢也 (大 H6 法)

元気にしております。

松成 健 (大 H8 文)

家族で最近オートキャンプによく行っています。最初はBBQの炭をおこすのも一苦労してましたが、今は、ようやく慣れました。食後に焚火をしながらウイスキーをラッパ飲みするのが楽しみです。

橋田 豊彦 (大 H12 経)

男の子3人の親として毎日、バタバタと過ごしております。先日、木曽駒が岳に行ってきました。広い空に心が洗われました。合掌。

谷 勇輝 (大 H21 理工)

生憎、当日は仕事のため、参加できません。

平成25年 春

平井 一正 (名誉会員)

最近体力低下を感じます。一ヶ月に 2 回くらい 1,000m 前後の山に登っています。血圧が高い以外は体にこれといった故障はありません。

西川 耕平 (顧問)

いつもありがとうございます。

福井 實 (旧 17 理)

ホームページで出席者の記事拝見しました。「ボケ」で来ましたが、足腰は元気にしています。今回でラストになるかも知れぬ…と思い総会に出席させてもらいます。慰霊祭にも行きたいと思いますが家族の反対で…欠席 残念ですが。

小川 守正 (旧 17 理)

90 才までは元気でクラス会でも皆に『しっかりしろ。元気出せ』と激励していたのですが 91 才になってから孫達から『おじいちゃん! 元気出してよ』と言われています。山岳会で若い方々から元気を戴きたく参加いたします。ヨロシク。

熊谷 治 (旧 19 文)

永らくお世話様になりありがとうございました。父 熊谷 治は昨年 平成24年11月12日に永眠いたしました。これまでのご厚意に感謝致します。故 熊谷 治 長女 熊谷 昌美

伊藤 五介 (旧 24 文)

元気にやっています。

中井 久夫 (新高 27)

とうとう老人ホームに入ってしまった。

北方 龍一 (新高 30)

兵庫県の仕事で相変わらず太陽光発電のコンサルタントをしています。

竹原 佑爾 (新高 33)

元気でおります。皆様に宜しくお伝え下さい。

山城 國暉 (新高 36)

所用の為欠席させていただきます。

福田 裕久 (新高 45)

退院後、犬の散歩中心に体力低下を防ごうとしています。この春に二人目の孫が生まれる予定です。

白川 浩平 (新高 H2)

今年の2月にサーフィンにハワイに行った時にひょんなことから、あの伝説のクライマー「鈴木 英貴」さんにお会いしました。今はクライミングから引退され、カイトサーフィンをしながらハワイで暮らされているそうです。

非常に穏やかで温かい心をお持ちの方で、色々と共感するお話もお聞きでき往年のスター、雑誌の中だけみて懂れた方とお会いでき本当に感激しました。

北川 裕也 (新高 H17)

東京勤務の為欠席します。

小原 耕治 (大 31 経)

当方まずは元気です。当日はお世話になります。ご苦労様です。

砂川 彰雄 (大 32 経)

総会のご案内有難うございました。元気に過ごしておりますが先日、電車で小学生に席を譲られそんな年寄りに見られるのかと驚きました。いささかガックリです。

雨宮 宏光 (大 33 経)

山岳会会費の郵便振込用紙を同封した効果はありましたか。長期間の会費未納会員の取扱いについて今回総会で議題として取り上げて下さい。

麻島 重彦 (大 33 経)

何時もご案内を頂きまして有難う御座います。苑の法要日と重なり誠に申し訳ありませんが失礼申し上げます。フルイチさん・リュウさん・・・身近な友達のことを思い出されます。寂しい思いです。関係諸霊の冥福をお祈りさせて頂きます。

鈴木 頼正 (大 33 経)

総会・慰霊祭おせわかけます。今のところ元気ですが何となく体力が落ちている感じです。4月からゴルフ開始、又ハイキングも3月4月に予定しています。山岳会総会には出席しますが慰霊祭は体調によって欠席するかもしれません。

芦田 匡平 (大 35 理)

今年で喜寿。腹は大きく喜んでいますが足腰が笑い始めています。共に頑張りましょう。

鳥居 威男 (大 35 経)

元気にしております。六甲山へは月に二度ばかり 2 月の雪の降った日には二度ほど! 盛会をお祈りいたします。(当日都合により欠席いたします)

藤安 賢一 (大 36 経)

毎日のように保久良までウォーキングをし足が衰えない様頑張っていますがヨチヨチ歩きから脱するには程遠い状態です。皆様にお目に掛かるのが楽しみです。

越田 和男 (大 36 理)

山岳部創部 90 周年の事業を是非検討下さい。

廣瀬 健三 (大 36 経)

山好きなテニス仲間の誘いによってコーラスグループに入って歌ったり又下手なギターを弾いています。オジサンピアノとの合奏少しましに成る為、甲南 中/高/大の同級生の半プロの特訓を受けてます。予期せぬ出会い有り楽しき哉ギヤ・チェンジ。

田中 孜 (大 36 経)

毎日、散歩・読書・スケッチの繰り返しの単調な生活を送っています。

牧野 宏 (大 36 経)

現会長・新会長(予定)大変お世話になります。がよろしく願い致します。

二谷 和成 (大 38 経)

元気にしていますが、最近では近くの低山に行くのも億劫になりました。総会・慰霊祭には出席させて頂きます。

森本 全彦 (大 39 法)

老いの坂を転げ落ち体力がめっきり弱ってきました。山行きは諦めず頑張って登っています。昨年は九州の高千穂連峰・韓国山に行ってきました。いつまで山登りできるやら。

武田 雄三 (大 39 経)

お世話役の皆様ご苦労様です。

福田 信三 (大 40 理)

山は裏山程度、行き先の殆どはGコーストかメルボルンです。来年は少し変えてトルコドライブとクルージングを試してみようと思います。

鵜木 洋 (大 40 文)

なんだか背中が曲がってきましたが、なんとか元気にしています。

安井 正 (大 40 経)

いつもお世話になります。

竹中 統一 (大 40 経)

皆さまにはすっかり御無沙汰致しております。本年も相変わらず岩手県 安比スキー場に十回以上通っています。四月上旬には仲間とスイス ツェルマットでスキーを楽しむ予定です。山行きも昨年は蔵王・七面山・赤城山と参りました。

水渡 靖夫 (大 40 営)

数年前に始めたスキーが面白くて毎年シーズンが楽しみです。今シーズンは回数少なく少し残念でしたが・・・誘ってくれる先輩諸兄に感謝しています。

横山 嘉壽子 (横山 洋) (大 41 法)

ご案内ありがとうございます。今年がんばって出席させていただきたいと思っています。よろしく願い致します。

井上 徹 (大41 営)

あいかわらずのゴルフと卓球・魚釣りにの
日々を伊豆の山奥でのんびりと楽しんでいます。
山よりも海に出かける方が多い状況です。

柏 敏明 (大41 経)

何時も山岳会のお世話をして頂き有り難うご
ざいます。3 月末から 4 月一杯まで、藤沢と東
京の娘の所に行っていますので残念ながら総
会・慰霊祭共に出席できません。ご盛会の程を
お祈り申し上げます。

浪川 純吉 (大42 営)

平井 新会長の活躍期待しております。

森岡 宏光 (大43 理)

幹事様いつもお世話になります。今は夫婦で
管理員として担当しているマンションで働い
ています。休日は月に一回近くの箱根や伊豆
等で旅行を楽しんでいます。

國分 廣昭 (大44 経)

よろしくお願ひ致します。

赤田 正和 (大44 理)

残念ですが仕事です。4/18~21 は東京です。
2/22 竹島の日御堂筋日の丸行進、明日は一日
と右翼？やっています。火曜日(3/5~9)中国
に出張します。社有林管理担当で三重・九州の
山にはよく登っています。森林の現状は問題
がありますね。

南里 章二 (大45 理)

4 月 20 日(土)午後 6 時半より学校による私の
送別会がありますので、30 分少しだけ出席さ
せていただきます。宜しくお願ひ致します。

矢吹 操 (大45 理)

元気です。昨年 11 月にフルマラソンに挑戦し
ました。予想通りの 6 時間でゴールできまし

た。65 歳までにしてみたかったのですが誕生
日を過ぎて、65 歳での挑戦になりました。い
つもお連絡ありがとうございます。出席でき
なくて残念です。

井上 知三 (大48 文)

今年の雪見会スキーに武田会長とご一緒した
時に平井幹男さんの次期会長のお話が出て今
期には交代かも・・・？それでは僕も事務方か
ら解放されるのではと思いました。しかし平
井さんなら中学校時代からの長いお付き合い、
もう少し事務方を頑張るつもりです。会員の
皆様今後とも宜しくお願ひ致します。

平井 幹男 (大50 文)

御無沙汰しております。山の方は大森・山本君
と共に行く春のスズコ取り、秋のカニ・キノコ
のほかは特にこれといった山行きもなく、
少々情けなく思っています。今季はもっと山
に行って青春を取り戻したい気持ちです。

高橋 けいこ (大50 文)

いつもお世話になっております。『息子の結婚
式の為欠席です』とこの短信に書きたいと憧
れつつ、今回も総会に出席します。

大柳 香代子 (大51 法)

もっぱらTVでの山登りです。

中澤 章浩 (大51 文)

お陰さまで元気しております。今年は両日
旅行の予定を入れてしまいましたので失礼致
します。昨夏久しぶりに表銀座を歩いてきま
した。人が少なく大層快適でした。

西村 清 (大51 経)

卒業前の面接で出身大学 学部を問われて
「甲南大学山岳部」と言って面接官に受けた
事を思い出します。

渋谷 一正 (大 51 営)

定年退職2年目の春です。毎日再雇用で同じように仕事です。

大森 雅宏 (大 53 文)

ご案内ありがとうございます。都合で欠席します。

要 裕晶 (大 55 営)

ご無沙汰しております。今回も残念ながら欠席させていただきます。盛会を祈念しております。

住友 健時 (大 55 法)

いつもお世話をお掛けしております。バリに行っておりまして戻っておりませんので申し訳ございませんが欠席させていただきます。元気に向こうで頑張っておりますので他事ながらご休心下さい。皆様によろしくお伝えください。住友 和子 母

山本 恵昭 (大 56 理)

総会当日は仕事が入っているので間に合わないと思いますが出席します。なかなか山に入る時間がとれず悶悶としています。

川野 幸彦 (大 56 理)

連絡いただきありがとうございます。何かと元気にやっております。ただこの年令で東京での单身生活は辛いです。5月の連休は一人で五竜岳へ登る予定です。皆様によろしくお伝え下さい。

今井 啓介 (大 56 経)

この4月より東京勤務になります。関西育ちの私が、これで関八州・関東一都六県の全てに住民税を払うことになります。真に感慨深いことがあります。一回位は関西で働きたかったというのが正直なところです。

八木 健 (大 58 経)

毎回のご案内ありがとうございます。又、返信が遅くなった事お詫び申し上げます。膝に続き頸椎(首)炎症で治療中です。運動量は減ってもアルコール量は増加するばかりで悪循環です。皆様によろしくお伝え下さい。盛会を祈念しております。

西岡 進 (大 58 理)

転職により単身赴任からは解放されましたので趣味の世界へと心踊らせる今日この頃です！

西名 俊英 (大 60 理)

いつも案内ありがとうございます。娘たちは小4・小2となりました。毎年キャンプに連れて行っています。そろそろ山歩きでも連れて行こうかと思っています。

木下 雅博 (大 H5 経)

転居したため郵便の転送に時間を要したため返信が遅れてすいません。東海地方で予備校講師をしております。問題集のライターをしたり、オープンキャンパスで講演したり、お陰さまで貧乏暇なしです。

森本 寛之 (大 H19 理工)

本人は2年位前よりタイへ駐在(日本の会社の駐在員)中です。両会とも出席できませんが、盛会を期待いたします。本人父親より



— 報 告 —

秋の集会

日 時 平成24年10月7日（日）～ 8日（月）

場 所 木曽文化公園内宿泊施設「駒王」（長野県木曽郡日義村）

次 第 10月7日 受付 / 夕食・懇親会

10月8日 朝食 / 記念撮影 / 部歌斉唱【山の歌】

出 席 鈴木敬吾(特別会員) 小原耕治(大 31 経) 砂川彰雄(大 32 経) 雨宮宏光(大 33 経)
鈴木頼正(大 33 経) 田辺 潤 (大 34 経) 越田和男(大 36 理) 田中 孜 (大 36 経)
武田雄三(大 39 経) 井本 洋 (大 40 理) 安井 正 (大 40 経) 柏 敏明 (大 41 経)
塩崎将美(大 41 経) 浪川純吉(大 42 営) 國分廣昭(大 43 経) 國分令夫人
石原浩二(大 44 理) 井上知三(大 48 文) 山本真博(大 48 理) 渋谷一正(大 51 営)
松下哲夫(大 52 理) 米山悦朗(新高 29) 川村静治(新高 40)



山岳会総会

日 時 平成25年4月20日(土曜日)

場 所 平生記念館

出 席 福井 實 鈴木敬吾 北方龍一
川村静治 小原耕治 雨宮宏光
鈴木頼正 芦田匡平 藤安賢一
田中 孜 牧野 宏 二谷和成
武田雄三 村上与利一 安井 正
國分廣昭 石原浩二 南里章二
井上知三 平井幹男 高橋けい子
中澤章浩 渋谷一正 大森雅宏

次 第

1. 会長挨拶 武 田
2. 平成24年度 事業報告
 - 1) 慰 霊 祭 石 原
 - 2) 木曾福島集会 渋谷
 - 3) 山 嶽 寮
 - 4) 大学山岳部の現状 *1 武 田
 - 5) 中高山岳部の現状 *2 南 里
 - 6) 会 計 報 告 山 本
(大森代読)

3. 平成25年度 事業予定

- 1) 慰 霊 祭 石 原
- 2) 木曾福島集会 渋谷
- 3) 山 嶽 寮 発 行 大 森

4. 議事

1) 会長交代並びに関連人事

会 長
平井幹男 (50 文) 新任
副 会 長
会長一任
事 務 局
井上知三 (文 48) 留任
会 計
山本恵昭 (56 理) 留任
慰 霊 祭

会長一任

秋の集会

渋谷一正 (51 営) 留任

ホームページ

塩崎将美 (41 経) 留任

山 嶽 寮

大森雅宏 (53 文) 新任

2) 記念事業検討【創部 90 周年】*3 新役員に一任

3) 長期間の会費未納者対策 *4

納付の案内を継続し、一定期間
経過後なお未納の会員には、送
付物を選択する。

5. 懇親会

(進行 総会:平井 懇親会:安井)

4 月 21 日 (日) に予定されていましたが「慰霊祭」は雨天との天気予報により中止しました

総会 「事業報告・議事」 から

***1 大学山岳部の現状**

女子部員1名。実質的に活動は休止状態。本年の部室棟取り壊しのため備品等の整理が必要となる。作業は部員のほか会員有志にて対応。部の存続問題(合併・休部・廃部)については現役にアドバイスをを行う。

***2 中高山岳部の現状**

部員なく休止状態。

***3 記念行事について**

記念行事については90周年として再来年に行事を行う。内容は新会長・世話役に一任。
(出版物・記念号等ではなく集会とする)

***4 長期間の会費未納者対策**

会費の納入について毎年案内をしているものの収納率の向上は難しい。今後も継続して理解を求め納付率の向上を目指す。一定期間経過後も納付のない場合、「総会・慰霊祭」「秋の集会」「会費納入のお知らせ」等の案内のみ送付し、「山嶽寮」は送付しない、などの区別で対応したい。

— ホームページから —

山行と集い

平成24年4月～平成25年3月 掲示板ダイジェスト

大関邸の花見 越田和男

2012年4月8日

昨日、恒例の海老名は大関邸での花見には甲南山岳会とJACの老人仲間12名が参集。付近の桜はほぼ満開、少々寒かったですが、皆さんお歳

最長老91歳の福井グリーンさんから60歳まで、平均年齢は計算していないが、山の仲間には本当にお強いです。

関西からも雄さん、お星さん（田中君）、ヤッサンの参加あり、雄さんの溪流釣りの釣果を焚き火（火の番はグリーンさん）で美味しく頂いたり、お星さんの秋田の銘酒（能代）を愛でたり。酒量はさすがに減りましたが、それは賢明な証拠でしょう。

体調不良をものともせず、楽しみ事は決行あるのみ、の大関の心意気に多謝！！！！

上信国境・浅間隠山 越田和男

2012年4月18日

都会の花見は終わったので、例年の通り花と残雪の山を楽しもうと、家内と信越国境に出かけた。里の桜はほぼ満開だったが、山あいでは蕾はかたく、山々はまだまだ冬枯れで残雪も多く、やっぱり今年は寒かった。

横浜の我が家を出るときは曇っており、富士山も見えなかったが、中央道の笹子トンネルを抜けると、甲斐駒、鳳凰三山など南アの連山がぱっちり、甲府盆地を北上すれば左に八ヶ岳。右手には異常に雪の多い金峰山、やがて前方にどっしりと浅間山など、名峰のオンパレードを楽しみ、その日の宿を軽井沢の山の古い温泉場小瀬温泉にとった。ここは昭和30年代に訪ねたことがあり、その時は今は無き超ナローゲージの軽便鉄道「北軽電

割には元気に野外の宴を楽しみました。

大関が体調を崩して心配だったが、国見さん、水渡君の料理、設営での助っ人のお陰で万事OKとなり、皆さんご満足。

鉄」の旅だった。森の中の一軒家は立派になったが当時の面影を残しており、懐かしかった。

翌日（4/17）は、二度上（ニドアゲ）峠からガスの中をうっとうしかったが好天を期待して山歩き。道中半分くらいは雪道で、先行者は簡易アイゼンを履いているらしい。少々歩き難かったが、構わずつぽ足でよたよた登ったら、標準タイム90分のところを2時間強もかかった。幸いガス帯をぬけたら視界が広がり、浅間隠山頂上1756mからはどっしりと雪を冠った浅間山東面が間近に望めた。赤ワインとともに大いに達成感を味わったのは言うまでもない。先行パーティは山慣れたオバサン4人組で、景色よりオシャレに夢中で少々うるさかったが、ちゃんとした服装で、熊よけの鈴を鳴らしながら颯爽と降りていき、あとは薄日の差す静寂の山頂をしばし楽しんだ。

西上州の山ふたつ 越田和男

2012年4月27日

今週はうまく晴れ間をつかんで一泊二日（4/24～25）の山歩きが楽しめた。西上州の山と云えば、妙義山、荒船山などの岩峰が有名だが、概して尖がった山が多く、今回登った物語山、三ッ岩岳もなかなか鋭い山容だった。

物語山 1019m

こんにやくで有名な下仁田の町から西へ入った西牧川の上流にある。取っ付きの荒れた林道で同行車が立ち往生して、抜け出すのに難儀するハブ

ニングあり。林道終点から距離は短いがいきなり400mの急登を何とかクリアして、悲しい伝説のある風変わりな山名の頂きに達した。南峰、中央峰、西峰の他にメンバ岩なる奇岩峰がる。

三ッ岩岳 1032m

南牧川の支流大仁田川の左岸に聳える、文字通りドライチンネン（或いはトレチメ）といったところか、結構な迫力の岩峰群である。これも取り付きからいきなりの急登 450mを固定ロープに助けられての登頂。狭い頂上には賑やかな先行4人パーティが居たが、我々の到着で腰を上げて下って行った。いつもならワインで乾杯のところだが、結構ヤバイ下りと歳をわきまえて誰も飲もうとは云わなかった。

例年なら両峰とも頂上付近はアカヤシオが満開で花のトンネルとなるそうだが、今年をまだ花はまばらだった。とはいえ、谷間の山里では紅、白、黄の色々な花々が満開で、豪勢な花見ドライブとなった。帰路立ち寄ってひと風呂浴びた下仁田温泉・清流荘もまた花に埋もれていた。一行後期高齢者2名を含むJAC図書委員会の仲間5名。

地獄の藪こぎ 平井吉夫

2012年4月30日

わがマンションでは4月下旬に熱海で2泊3日の麻雀大会をやるのが恒例です。いつも私は麻雀をせずに一人で箱根山系の山歩きをします。今年は22～24日でしたが晴れたのは24日だけ。その日私は湯河原から幕山～自鑑水～南郷山のハイキングに出かけました。山桜の散り始めで、まことに快適でした。ところが自鑑水から欲を出してコースをはずれ、箱根方向（星ガ山）へかすかな踏跡をたよりにどんどん登るうちに道がなくなり、それでも私は藪をこいで登りつづけました。初めは面白かったのですが、やがて藪（身長2倍ほどの密集した笹竹にツタが縦横にからみ、所々に棘の灌木）にからめとられ、にっちもさっちも行か

なくなり、無理な足の動きをするのでコムラガエリを連発し、苦しくてたまらず、バカなことをしたと深く後悔しました。とにかく脱出しなければならん。下るしかない。でもまた延々と同じ藪をこぐのは嫌だ。というわけでなるべく明るい方へ藪をこぎこぎ悪戦苦闘のトラバースをして、やっと尾根筋の踏跡を見つけ、そろりそろりと白銀林道に下りました。

藪の中で身動きがとれなくなったときは、ああ、ここで死んでしまうのかと本気で思いました。まあそろそろ死んでもいいけれど、KACの会員が箱根の藪の中で野垂れ死にするなんて、いかにもみっともない。その意識だけが脱出と下山のエネルギーを私にあたえてくれました。深い藪こぎに必携の軍手やナタもなく、年を考えず登高に目がくらんで強行したことを、大いに反省しています。その後数日（つい昨日まで）私はふくらはぎが痛くてビッコを引いていました。

仙吉さんへ 田邊 潤

死なんてよかったね。何よりです。

山歩き、強行軍など足を使うときはツムラの芍薬甘草湯68番が必携です。今や常識ですぞ。

薬局で簡単に買えますし、医者に通っているなら言えば必ずくれます。私は常時携帯しています。即効性の漢方薬で、効くまでなん袋飲んでも、私には異常がありません。多い時には6袋も飲む時があります。是非試してみてください。

扇の山 山スキー 山本恵昭

2012年4月30日

大森さん、川野と3人で、扇の山に山スキーに行ってきました。

28日、昨年カニキノコ会で利用した上山高原避難小屋まで除雪されていた。そこから山スキーを履いて、林道とブナ林の中を2時間で小ズッコ避難小屋。山頂避難小屋まで行こうと思えば行ける時間だが、今日はここまで。貸切、薪ストーブでの

んびり鍋料理。

29日、ブナの森を山頂へ2時間。4月の嵐のせい
か、折れた枝が雪面に沢山落ちていて行く手を阻
み、歩きにくい。山頂の避難小屋でのんびり。積
雪はまだ1m〜2m程あり、いつもキノコ狩りで格
闘するネマガリタケは、完全に雪の下。復路は上
りもあり、1時間で小ズッコ避難小屋。さらに30
分ほどで上山高原。

コシアブラやコゴミ、ワサビを採って、お土産
に。湯村温泉薬師の湯で汗を流して神戸へ。

今年は、雪が多く近場で雪山と新緑を楽しみま
した。川野は山スキーを初体験。2日間とも快晴、
半袖でも暑すぎるくらいの天候のなか、のんびり
登山でした。

奥三方岳

山本恵昭

2012年5月6日

神戸大現役から予定していた穂高合宿中止の
連絡を受け、急遽大森さんと岐阜県白川村の奥三
方岳に1泊で行ってきました。

4日、道の駅「飛騨白山」で仮眠して、6:40 ず
ぐ前の林道を登る。30分程でブナ林の急登の道、
1300mほどからは残雪の上を歩く。朝は晴れてい
たのに、雲行き怪しくなり時々雨も降り始める。
やせ尾根を超えると、三方崩山 2058mに 13:40
着。いったん下り、広い雪面を登り返す。奥三方
岳の肩 2000m付近にテント設営 15:00。テントに
入ってひと段落すると、天候が急変し突風とみぞ
れが激しく打ち付ける。夜中、風が強かった。

5日、風が強くガスに包まれているが、天気は
回復傾向と判断。5:40 発、窪地のような不思議
な地形を横目に、ひと登りで奥三方岳 2150m山頂
6:00 着。上空に青空、雲にブロッケンが出たと
喜んでいると、見る見る晴れて白水湖と白山東面
台地が目前に広がった。奥三方岳からさらに西に
進み、1980mピークとのコルから急な崩壊地を適
当に雪面をつないで下る。森の中を下ると 7:30
間名古谷林道跡へ出た。ヤブだらけの林道跡を辿

り、さらに大白川林道をイワナや山菜と戯れなが
らひたすら下ると登山口ゲートに 13:00。道の駅
「飛騨白山」併設の「しらみずの湯」で汗を流し
て、渋滞の中神戸へ。

急に計画を立てて、ルート設定をしたので本当
に実行可能か不安でした。しかし、行ってみると、
緩急取り混ぜた不思議な地形、程よい緊張感、雪
と新緑のコントラスト、自然度豊かな巨木の森、
山の幸と、今の時期の魅力をぎゅっと濃縮したよ
うな山行となりました。



氷ノ山神大ヒュッテ 山本恵昭

2012年5月20日

神戸大の現役学生を積んで氷ノ山神大ヒュッテ
に行ってきました。新入部員が4人参加で、うらや
ましい限り。カンリガルが遠征で一緒だった矢崎
くんは1歳の息子さんを抱っこして奥さんと、石丸
くんは大学院生、韓国からの留学生やその友達
の中国人留学生もまじえて賑やかな会でした。

いまだに上部は登山道に雪が残り、スズコも出
遅れ中。スズコ狙いの人は苦戦をしていました。
代わりにコシアブラがちょうど良いタイミングで、
素揚げで賞味しました。

写真の投稿

管理人

2012年6月6日

越田さんから「新制初期会員奥飛騨の集会」の
写真が届きました。アルバムにUPしました。



新制初期会員奥飛騨の集会 2012

今回 13 名参加。早朝出発した石原君が抜けています

スズコキャンプ 井上 知三

2012 年 6 月 17 日

山本 恵昭さん 生憎の雨でしたが楽しいスズコキャンプありがとうございました。先発の塩崎さんゲストの山口さん・森本さん・平井さん・大森さん・恵昭さん雨の中たくさんのスズコを採って頂き感謝・感謝です。3 時頃より武田さん・安井さん・谷さん・私と加わりシェフ恵昭さんの手料理と美酒で夜更けまで楽しい時を過ごしました。翌朝天候も回復し記念撮影・解散後私と谷さんは氷ノ山に登り昼食に出石そばを食べその後谷さんの希望で天空の城「竹田城址」を散策後帰路豊中に向かいました。恵昭さん次回も楽しい集まりお願い致します。

スズコキャンプ！！ 谷 勇輝

今回スズコキャンプに初めて参加させていただき、ありがとうございました！！

先発の皆さんと一緒にスズコ採りのお手伝いできなくて、残念です。

採って来て下さった塩崎さん、ゲストの山口さん、森本さん、平井さん、大森さん、恵昭さん アリガトウございました！！

炊いても、焼いても、揚げても美味しかったです。

(無題) ポンポン山の山口

16 日、去年に続いて「スズコキャンプ」厚か

ましく参加させて頂きました。家を出る時からの雨と泥とヒルに尻込みしてしまって……筈の収穫に貢献出来ず、申し訳ありませんでした。山本さんの絶品の山菜フルコース本当に美味しかったです。また参加して下さい。有難う御座いました！
(塩崎の友達)



雪見会仲間に変身者 南井英弘

2012 年 6 月 14 日

6 月 7～9 日、KAC 柏さん、浪川さん、KGAC 木村氏、小西氏と立山スキーにご一緒しました。初日 浄土山で足慣らし。滑降を始めると大型で格好良く滑る柏さんの姿に雪見会仲間はボカーンと口を開けて見入った。ニセコで凄いい特訓を受けてきたらしい。1 本目から取り残され寂しかった。

今年は残雪が多い上に 4 日前に降雪あり。山崎カール方面はいたるところにデブリあり、前日ボーダーが一人巻き込まれたと。

2 日目 好天に恵まれ御山谷を滑った。ここでも柏さんは変身振りを発揮した。つわもの達は谷底から竜王岳の稜線まで往復した。

以上 柏さんの大変身のご披露まで

KGAC 南井英弘

立山へ連れて行って貰いました

柏 敏明

2012 年 6 月 15 日

南井様、木村様はじめ皆様にお世話になり有難うございました。

小西さんから、毎年、6月の関学の立山スキーに誘われていたのですが、圧雪した雪面しか滑れない小生は、とても無理と断り続けておりました。南井様はヨーロッパ・アルプス帰り、木村様は関学山岳会きつてのスキーの名手。小西さん、浪川さんは云わずと知れた山スキーのオーソリティー。このメンバーにはとてもついていけないと躊躇したのですが、今年は雪も多いので是非参加しろと云われ、おそろおそろ参加した次第です。山スキーはもう5〜6年振り、梅池の早稲田小屋まで行って以来です。

この度、南井様から掲示板に身に余るお言葉を頂き、恐縮しています。皆様についていこうと必死に滑っていただけて、今度、皆様方の前で滑って、どれだけ冷やかされるか、今から心配です。スキーの腕前は兎も角、浄土山からの滑降も楽しかったですが、一の越から槍ヶ岳や笠ヶ岳等を遠望しながら、小生でも回れる雪質に恵まれ、誰もいない御山谷を我々だけで滑って降りた時の気持ち良さ。大きな岩の上で、峰々を見上げ、日向ぼっこをしながらワイワイと摂った昼食も楽しかったです。1時間掛けて登り返すしんどさはありませんでしたが、山スキーの醍醐味を味わわせて頂きました。有難うございました。

浴槽から一の越や山崎カールから滑ってくるスキーヤーを見ながら入れる、室堂山荘の大風呂も気持ち良かったと付け加えさせていただきます。思いも掛けぬ楽しい残雪スキーを経験させて頂き、改めて御礼申し上げます。



久しぶりの山

福田信三

2012年6月21日

1週間ほど北海道に滞在。その間大雪の黒岳に登りました。

前日の雨が嘘のように止み、思い切ってロープウェイに乗り込みました。シーズン初めで人もまばらでしたが、思いのほか多くの高山植物が咲き始めていました。行程の半分くらいが雪渓で、もがきながらの上下せいか、翌日は太股の痛みにかめっ面でした。

低山巡り

廣瀬

2012年7月18日

一昨年から昨年にかけ、六回に分けて東山三十六峰を歩き、其のあと先週の「船山」登りまで、京都の西山を歩きました。(JACのゆるやか山行)こんなところにこんな山が有るのかとか、歴史いわれのある場所も訪れる事が出来、いろんな発見が有り、それなりに楽しい歩きでした。船山(大文字五山の一つ舟形の所)からは本家の大文字も正面に望め、数年前、森本カンロクの誘導、地元の芦田さんの説明付きで、KACの皆さんと見た大文字点火の迫力あるあの暑い夜を思い出しました。

この酷暑によくもまあ 福田信三

広瀬さん、このくそ(下品な言葉で失礼します)暑い日によくもまあ山歩きなんてされたねえ。おまけに場所は京都。元気な子でも黙る祇園さんの時期。そのお元気、何よりです。

私は、明日教会墓地の雑草抜きです。ホームレスのおじさん達と一緒にやります。熱中症に気をつけて頑張ります。

夏の立山

越田和男

2012年7月23日

最近の立山といえば、3年前の10月に石原君の案内で、病み上がりの平井も同行して、室堂乗越の横山ケルンを訪ねたことがあったが、夏の立山

は50数年ぶりということになる。

先週、会社仲間に誘われて、みくりが池温泉に2泊してきた。うまい具合に梅雨明けの好天で、豊富な残雪、高山植物、遠近の懐かしい峰々の眺めを堪能した。元気な仲間は雄山頂上へ向かったが、小生は息切れ激しく、一の越まで2時間以上かかる有様で、浄土山の中腹までで我慢した。

宿の「みくりが池温泉」がほぼ満室で、中国語が飛び交う様にはおどろいた。旅館と山小屋の間みたいな宿で、中途半端。雷鳥荘のほうがよかった。



雨飾、戸隠山 森本

2012年 7月31日

北信の雨飾山と戸隠山に7月19日～22日 山本薫、柏、浪川、森本

20日 曇り 雨飾山目指して

曇り空で小谷温泉キャンプ場よりブナ林の中を歩き出す。強い陽射しが無いのが救いだ。荒菅沢の雪渓を対岸に。大休止した後山頂まで急登となり一度に汗がでます。頂上直下には沢山の花が咲いており、疲れをいやしてくれる。北峰で昼食をとった後双耳峰の南峰にも寄ったが視界きかず一路下山開始。柏君は降りになると凍傷の後遺症で踏ん張りが効かなくなって、歩きにくそう。7:50～13:00（登り3ピッチ降り2ピッチ）

築450年の山田旅館の温泉につかり妙高高原に移動。

21日 曇り時々雨 落ちずに行けた戸隠山

戸隠山1904m手前の稜線20m程のナイフリッジ

の怖かったことと言ったら参りました。

最初に出てきた蟻の戸渡り、ここは、40cm幅の凸凹道。手を使つての4足歩行。ドン吉君や薫さんはなんなく歩いていたが、こちらは4つんばい歩行で乗切る。次なる剣の刃は幅が30cmほどと狭く両サイドは切れ落ちておりここは跨いで股摺りで乗り切る。古希を迎えたオジンが行く山ではないと思った。ここが百名山に選ばれなくてよかったと思う。修験道の道場は一步間違えたら命を落とす所で修行するのかな。

下山も同じルートにしていたが、雨が降り出し自信喪失に陥ってしまい九頭龍山～不動～戸隠牧場経由に変更してもらう。雨の中の沢道もチョロチョロ水が川水になってやけくその渡渉の連続。下で待機していた柏君に迎えられて、戸隠神告げ温泉に直行。元気な老人の山行も無事終了。戸隠奥社入口7:15～戸隠八方峠9:30（2ピッチ）～戸隠山～不動避難小屋～戸隠牧場13:15（2ピッチ）

22日 曇り 妙高高原～斑尾高原～小布施で帰阪

今年は常連の小西さん、竹中さん、水渡さん、井本さん等が不参加でしたが、次回はぜひ沢山の参加を。

赤石沢から赤石岳 山本恵昭

2012年 8月14日

8月9日から12日、浪川さん、大森さんと3人で、南アルプスの名溪、赤石沢へ行ってきました。

8月9日、畑薙ダム駐車場で3,000円の小屋利用金券を購入し、東海フォレストの送迎バスに乗る。1時間ほどで牛首峠へ。

川原へ下り、沢準備を整えて9:00出発。連続する小滝や淵を順調に越えていく。美しい沢であるが、下部は水量が少なく迫力に欠ける。1か所へつることができない淵が現われ、空身で泳いでザックと後続をロープで手繰り寄せる。泳ぐイワナを眺めながら平凡な川原歩きをしばらく続けると、取水ダムに13:00到着。取水ダムより上は水量も増え、北沢出合を越えるとまた滝が連続し名溪ら

しくなる。

14:30 門の滝 15m は、中央に巨大なチョックストーンを抱え、堂々としてなかなかの迫力である。ここはロープを出して確実にビレイ。右岸の草付き岩を登って、残置ハーケンを頼りに外傾したバンドを落ち口ヘトラバースする。15:30 次は洞窟の滝 10m、ここもロープを出し、空身で登る。洞窟内の残置テープをアブミにして岩の間をすり抜け、出口の狭い穴から這い出る。洞窟の外から 3 人分のザックを吊り上げ、後続をビレイ。左岸からの崩壊地の大ガランは、非常に不安定な土混じりのガレ場で越えるのに苦労する。

大ガランを越えた川原を泊地とする 17:00。最適な場所は先行 4 人パーティが使っていたので、その下のそこそこの場所を整地してテントを張る。盛大な焚き火とイワナ塩焼きの予定であったが、先行パーティに釣られた後で釣果 0 尾。焚き火の横で寝てしまう。

8 月 10 日、朝からイワナ 1 尾確保し、焚き火で塩焼きに。7:30 発、ここから上部の川床はラジオリア板岩が多くなる。海に住んでいた放散虫というプランクトンが変成した赤いチャート岩である。さすが赤石沢、赤い岩と青緑の水のコントラストがなんとも素晴らしい。

8:30 大ゴルジュに到着。ここは右岸の大高巻き。シンボネ沢のガレを少し上って樹林帯の踏跡を辿る。途中、かなりの高度感で足を滑らせたら下の滝までまっさかさまという感じなので、念のためロープを出して 1 ピッチ分ビレイした。1 時間ほどかけて川原へ戻る。

大釜まで行くつもりが、疲れて深い釜を持った 3 段の滝上で休憩。ふと見ると大イワナが……。我儘を言って大休止にしてもらい、ちょっと釣りタイム。流木を集めて、3 尾塩焼きに。

13:00 少し進むと明るく開けた大釜に到着。滝は小さいのに、均整の取れた深く美しい釜である。しかも大物イワナが一杯悠然と泳いでいる。しかし、さすがに先を急ぎたい浪川さんにもう一度釣

りタイムとは言い出せず、膝まで浸かり水中カメラで撮影のみとする。

16:00 百間洞沢出合に到着。最適な泊地があり、今日はここまで。テント設営と焚き火は大森さんたちをお願いして、食糧確保に再び下流に。このイワナ達は持って行ったミミズはお気に召さず、覗きに来て食わないことも多い。跳びまわっている白い蛾を捕まえて餌にすると、盛んに食いついてくる。先日武田さんに頂いた毛ばりを使うと、一発で大物が釣れた。8 尾確保し塩焼きとみそ焼きに。時間を忘れて豪快な焚き火を楽しんでいると、日付が変わっていた。



8 月 11 日、6:30 発。小滝を次々と越えていくが、小さな流れにもイワナの姿が見られる。大きな滝となっている枝谷を過ぎると百間洞大滝に到着 7:30。左岸の草付を登り、落ち口ヘスラブのトラバース。ここも落ちると終わりなのでロープを出して確実にいく。あとは源流部をひたすら登り、9:00 百間洞山の家に着く。しばらくすると先行していたはずのパーティが疲れた姿で現れる。百間洞沢で間違えて支流に入ってしまったい何とか稜線に抜けて 1 泊したそうである。

小屋前のベンチを使わせてもらって、のんびりと沢装束から一般登山姿に変身し、10:00 に出発。沢の緊張が解けて、荷物が一歩ずつ重くなっている。長い道のりを何とか赤石岳山頂に 13:45 到着。急な下り道をひたすら辿るが、足が棒になっている。16:00 頃から雷が鳴り雨も降り出す。コテバ

テで赤石小屋に 16:40 到着。バス搭乗時の金券 3000 円に 1500 円追加し、4500 円で素泊まり。水は無料。トイレ協力金 100 円。毛布などの寝具を使うとさらに 500 円いるが、シュラフを無料で使わせてくれた。雨で濡れた物も乾き、快適。

8 月 12 日、朝食を済ませ、これから登る他パーティを見送って 6:00 にのんびり出発。昨夜のストレッチ効果も歩き始めの 30 分のみ。すぐに膝はガクガク、沢でひろった木の棒を支えになんとか榎島に 9:30 到着。10:30 のバス予約を取り、浪川さんにケーキセットをご馳走になる。

畑薙ダムへ戻り、途中白樺荘で入浴 500 円。お土産に茶葉を買ったりそばを食べたりしていると、高速道路の大渋滞に巻き込まれ、23:00 神戸に帰宅。

赤石沢は、以前から名溪としての噂を聞いていて、一度は訪れてみたいと思っていました。取水ダムが出来て「沢の王者」と呼ばれた昔の面影はなくなったといわれていますが、変化に富んだ素晴らしい沢でした。南アルプスの豊かな緑と豊富なイワナ、沢に 2 泊して焚き火と釣りを堪能しました。最後に、右手に聖岳、左手に荒川岳を望みながら、赤石岳 3120m に登り上げるのもご愛嬌か。ただし、中高年にとっては体力的に厳しい。鉄人浪川さんもさすがに苦勞されていました。

残暑お見舞い申し上げます 武田 雄三

(略) 取水堰堤の出来る迄は、大井川本流から差(遡上)して来る 40 センチクラスの大アマゴがソコカシコの淵に、上流域のイワナも持ち帰るのにサイズや数を考えないと困るほど釣れた。

(溪流釣師=渓師=タニシにとってはパラダイスだったよと良く聞かされました。)

それも昔の事と…二度と戻らぬ自然破壊は避けて貰いたいと思いますが、昨今重視の自然エネルギー活用には……。諦めています。

20 歳ほど若ければ同行したかった、アーアー羨ましいー。何はともあれ「体力・気力・良き仲間」無くしてはの赤石沢遡行報告、アリガト

ウ。

赤石沢のイワナ 山本恵昭

武田様 スズコキャンプのときに頂いた毛鉤、イワナに抜群でした。有難うございました。また御指南お願いします。

2 泊目のキャンプ地で、人のあまり入っていない奥赤石沢側に毛鉤を落とすと、1 発で大物が飛びついてきました。こんな小さな流れに、なぜこんな大物が居るのと驚きです。

ただし、糸を結ぶ穴の大きい針のみ使用しました。夕方の薄明かりの中では釣糸が良く見え、穴の小さい方の針には糸が通らなかった。

やはり、取水ダムより下流は水量が少なく、ダムの近くでは枯れて流れていない部分もありました。でもそんなところでも岩魚は結構居ました。

また、ダムの上、中流域では瀬にも淵にも沢山イワナが居ました。大物を見つけると思わずわがままを言って、行動途中に釣りタイムを設けてしまいました。

上流の百間洞沢にも、かなり源流部までイワナが居て、泳ぐ姿を楽しませてくれました。さすがに健気で、釣るより「頑張ってる生きていけよ」と声援を送ってきました。なぜ、滝より上のあんな源流部にまで岩魚が居るのでしょうか。誰か放したのでしょいか。

(無題) 飯田 進

赤石沢、羨ましいなあ。今夏梅池で、親沢や楠川で竿をおろそうと出かけましたが、午前 4 時にはすでに先客あり。でも彼らも釣果無し。岩魚は赤石沢に避難した後のようでした。

結局釣ったのは、前田館の裏の藪の中に流れている幅 50 センチほどの流れに、びっしりと張られたクモの巣を重い錘で突破。ブドウ虫を餌にチョン懸したら、23 センチのまるまると太ったのが釣れました。せめてもの慰み。それで青木湖にウグイを釣りに行ったら、10 匹のうちブ

ラックバスが7匹。木崎湖もそうでしょう。ブラックバスを三枚に下ろし、生姜醤油に漬けて、フライにして食べてみたが、小骨が多く、しかもその小骨が固くて味ももう一つ。川も湖もわやになりました。ああ、赤石沢にいけないなあ。

赤石沢 武田雄三

恵昭さん イワナ釣師にとっての夢は「魚止の滝で幻の大物を上げる」、その為には危険を物ともせず源流域へ・・・タダ・タダ・ヒタスラに・・・下手な山屋より遡行技術や情熱では上。

陸封型のイワナは(本土の大半は此のタイプ)太古の地殻変動や他魚種との競争の結果、冷水域に活路を・・・。

餌の少ないエリアで生き抜くので、水性・陸生昆虫類はオロカ「ヘビ・カエル・サンショウウオ・ネズミ」等も食べ、捉えた獲物を絶対逃さぬとばかりに彼らの上顎歯は鋭く、且つ内側を向いています。

彼らの食事時は「朝・夕のマズメ時」・・・これは、川虫類の羽化や外敵に襲われにくい為と思われ・・・。

このゴールデン・タイムに仕掛けトラブル発生した時の焦りは尋常のものでは有りません。特に針を通すのに一番苦労します・・・イライラ・イライラ・・・。それで針穴(アイという)の大きいルアー用の針を使う仕儀に。

イワナは標高2千2～3百メートルまで生息すると言われていますが、杣人や猟師が貴重なタンパク源として稚魚を一升ビン等で担ぎ上げ、彼らの隠し沢に放流した事もあるようです。

最近ではイワナ愛好家が増殖させる為、分水嶺まで雌雄の成魚を担ぎ上げ放流する実験を行っています。

アマゴに関しては、紀伊半島北山川上流域の白川又川最下流で右岸より流れ込む岩屋谷滝(下から30、70、130メートルの複数の連続する滝を有し、沢登りでも有名)の滝上流で入れ食いを体験、まさかのまさかこんな所にアマゴが

居るとは。釣友が朽ち果てた杣小屋を指差し「皆切り(カイギリ 一山全部の伐採)の時に杣人が持ち上げ放流したんだ」紀伊半島には多いとの事。

小生が遠山川(天竜川上流)に通い詰めていた頃、若手の釣り師が聖岳を越えて反対側の聖沢(大井川支流)に遠山川最源流のイワナを放流していました。

赤石沢は東海フォレスト(東海パルプ)が伐採権を有するエリア、古くから森林管理のため多くの杣人が出入り、此等の衆が担ぎ上げ放流したかも知れません。私有権が存するため比較的自然が守られていると言えます。

以上取止めの無い回答で申し訳ありませんが・・・。

久しぶりの上高地 越田和男

2012年8月23日

涼を求めて、ふと思い立って、20数年ぶりに梓河畔に立った。夏の盛りの河童橋は相変わらず観光客であふれていたけれど、やっぱりあの景観は捨てがたい。河童橋の近くで、中高年のグループの会話に巻き込まれて一言。

オバハン、岳沢方面を指差して「あの白いのん、雪とちゃうやろか」

オッサンが答えて「何いうてんねん。今頃雪なんかあるかいな。あれは白い岩や」

小生思わず「あれ雪でっせ」

オッサン「えー、ほんまかいな」

せめて明神あたりまでは歩くことにして出発し、何となく欲を出して徳澤まで、更にその先、新村橋まで往復したら結構しんどかった。見上げる明神や前穂の東面の急峻さは記憶を塗り替えねばならなかった。

帰りのバス停で、涸沢一泊のあと、北穂を往復して下りてきたという若いグループと話していたら、横尾からの水平道路の長さにウンザリしたとのこと。思い起こせば、若かりし頃もこの道は長

かった。昭和35年の冬、滑らぬスキーに腹を立てながら、槍の肩から上高地までたっぷり二日かかり、ポンが最後にスキーをエイヤッと投げ捨てたりしたことなどを思い出した。

錫杖行きました 西濱昌典

2012年8月28日

皆様ご無沙汰しています。1992年（平成4年）卒業の西濱です。

8月25・26日の土日で錫杖岳前衛壁の3ルンゼと左方カンテに行きました。

ここ10年くらいは二輪と四輪兼任するラリードライバーの友人と山へ行っています。今回も例に漏れず彼と行きました。よって、岩登りとしての戦力には余りならないのですが、楽しい山登りを継続しています。

今回も2ルートとも制覇はできませんでした。3ルンゼは2ピッチのみ、登り開始が16時でしたので仕方ありません。

左方カンテはレンタカー返却時間があるため10時半クライミング終了と制限がありました。核心と思われる7ピッチ目のA0を過ぎたところで止めました。

いつもどんな山登りでも楽しいですね。

（無題） 平井吉夫

今の西濱君と同じ年頃だった頃、賀茶や越田たちと錫杖に登りに行ったことを思い出します。中尾部落の中畠家に泊まり、早朝の暗いうちに出発したのですが、情けないことに岩場の取り付きまで延々と登ってへばってしまい、岩登りはせずに帰ったんじゃないかと思います。コッシンの優れた記憶ではどうなっていますか。錫杖は藤木九三が「岩の呼ぶ声」（大正14年）で、おそらく日本人では初めてだと思いますが、近代ロッククライミングの言葉を存分に使って報告したRCCの岩壁・岩稜登攀の舞台のひとつです。西濱君の報告を読んで、あのとき登っておけばよかったと、つくづく思います。

錫杖 越田和男

平井に、記憶力優れるなどおだてられているが、実はつまらぬことでもメモに残すというつまらぬ癖があるのみ。

錫杖に行ったのは、昭和44年の5月の連休の時。大学卒業8年後だから今の西濱君よりもっと若かった。恥ずかしながら、錫杖の岩場に登ろうなんてことは毛頭考えもせず、夜どうし運転して中尾の着いたその日の午後、錫杖沢の下見にザイルも持たずに出かけて、しんどくなったところで引き返したというのが実情。メンバーは田邊、伊丹、藤安、平井、北川、越田の6名。石原君は独りで白出沢方面へ出かけた。

泊まった宿は、平井の言う通り、往年の名ガイド中畠政太郎の子孫の民宿だった。ちなみに、同じ場所に現在「谷旅館」という立派な宿がある。

その翌日は、穴毛谷をかなり上部までつめて、適当なところで昼寝して帰った。平井の記憶と小生のメモのどちらが正しいか、あまり深く追求する価値ありとは思えないので、これで打ち止め。

南会津・七ヶ岳 越田和男

2012年9月2日

夏の終わりに南会津・高杖高原にパミール中央アジア研の仲間4人と2連泊。七ヶ岳1636mに登ったが、車でもっと上まで行けるつもりだった林道に入らず、スキー場の中、標高差700m、日陰のない暑い車道を延々と登る道にまいてしまい、バテバテの一日となった。

眺望は見事で、尾瀬のヒウチ、会津駒、那須連山などなど、東北部の山々がほぼ全て望めて満足したものの、得意はずの下山も難行苦行。一行に遅れること一時間強で、大分迷惑をかけた。4日後の今日に至るも、まだ太股が痛い。

翌日は、はじめからリタイアして、独り、かつての秘境南会津をドライブして、木賊（トクサ）

温泉の河原の無人の露天風呂に浸かったりして身体を休めた。山本君たちの山行きと比べて、いくらなんでも恥ずかしい次第だが、こんな目に会っても、性懲りもなく、山を歩いていることをご報告する次第。

泊めてもらった芝浦工大のセミナー・ハウスの立派な施設には驚いた。ホテルなみの客室、食堂、露天風呂付温泉大浴場、料理も満足。これが1泊2食@¥6200ー。学生なら当然もっと安く、いまどきの学生さんが羨ましい限りだが、利用率を聞くのは遠慮した。

白髪岳

廣瀬健三

2012年9月28日

昨日、以前から是非登ってみたかった丹波篠山の白髪岳と松尾山に行きました。700m級の山ですが、急登あり、物凄い下りあり、多少の岩場もありでした。快晴で山頂の眺望もよく、久しぶりに、忘れかけていた登山後の充実感を覚えました。ビールも一段と美味かったです。平井一正先生も軽やかに歩いておられました。(JAC関西支部の山行の日)

バットレス

塩崎将美

2012年9月30日

7月にやった暑気払いの席で谷くんがバットレスに行きませんか。酔った勢いで皆、行こいこ。谷くんお世話になりました。

登山道から登りがこんなにきついとは。

谷くんやN君くんはアブミ無しで登りましたが私には無理、アブミを使いカラビナをつかみようやくフェースに立つ。そこから先はスイスイのはずがスタンスやホールドが小さく四苦八苦、何とか登りきったが手足がふるえヘトヘト。現役の時、授業をサボってザイルを肩に良く来た時の印象とはえらい違いでした。



写真は松成君のお嬢さん、小学4年生（名前を聞きましたが忘れてしまいました、ゴメン）と集合写真。登ったあと私が撮った写真は手ブレで全てボケてました。



甲南バットレス

柏 敏明

谷さんを始め、皆さんにはお世話になり有難うございました。40数年振りに訪れた甲南バットレスが、岡本の駅からこんなに遠く、キツイ斜面があったとは思いませんでした。現役時代には簡単に取り付き迄行けたのに、途中からfixザイルに頼らねばならない程でした。もっと、小さい岩場と思っていましたが、歳月が岩場のスケールを大きくしてくれた感じでした。昔取った杵柄で、さっさと登られる人、岩を堪能しながら登られる人、様々でしたが、自分の限界を理解している小生は下から見上げるのみでした。中でも松成さんの娘さん、10歳の結衣ちゃんは、1～2回、ウォールを経験されたそうですが、本番は初めて、それが見事に登攀に

成功されたのでした。降りる時も懸垂で取り付き迄下降してきました。大拍手でした。帰り道、今度は保塁へ行きたいなあとの話しが出ていました。楽しい一日を有難うございました。

いわのぼり 松成 結衣

本物の岩をのぼるのは初めてでした。
楽しかったです。ありがとうございました。
から揚げごちそうさまでした。

昨日のお礼 松成

昨日は娘とお伺いさせて頂き、有難うございました。

10 数年ぶりに甲南バットレスを訪れましたが、先輩方と同じでこんなに難しかったつけというのが正直な感想です。現役時代、あれ程登り込んでいたのに、すっかりムーブを忘れており、小ハングを乗越すのも一苦勞でビレーヤーの谷君にかなり助けられました。

谷君、ありがとうございました。

ハングを越してからもしばらくは手がかりがあまりなくこんなにツルツルだったつけという印象でした。年月は岩のグレードをUP させますね。

甲南バットレスお疲れ様でした！ 谷 勇輝

当日、天候が危ぶまれておりましたが、多くの先輩方に参加頂きまして、有り難うございました。ゆっくり昼ご飯の時間を取れず、忙しなく登ることになりましたが、何とか雨に打たれることなく、ギリギリ岡本駅にたどり着けて良かったです。

私自身、甲南バットレスは現役3年生以来(5年前)でしたので、とても懐かしく感じました。

今回は堡塁とのお声もありましたので、また掲示板でご連絡させていただきます。

甲斐駒と仙丈 山本恵昭

2012 年 10 月 11 日

7 日 8 日と急に予定が空いたので、妻を誘って甲斐駒ヶ岳と仙丈ヶ岳に行ってきました。

7 日北沢峠でバスを降りて 10 分、駒仙小屋キャンプ場でテント設営。その後、仙水峠経由で甲斐駒ヶ岳へ。生憎のガスの中だが、登山道も山頂も大混雑。帰りは双子山経由でテントへ。チュウハイで乾杯の後、すぐに赤ワインをグビグビと。焼肉もスタートし、小屋でおでんも購入。明るいうちから良い調子でテント前でごろ寝。

8 日快晴の中、藪沢小屋経由で仙丈ヶ岳へ。黄葉が朝日に輝いて美しい。下山は小仙丈ヶ岳経由でテント場へ。テントを撤収してバスで下山。

高遠の桜の湯で垢を落とし、そこで地元の方から「桜の季節にぜひおいで。帰りにローメンを食べてみたら」と。教えてもらった伊那の「万里」という店でローメンを食べる。汁の多い焼きそばという感じだが独特の旨みがある。

高速代をケチって、ゴンベ峠を越えて中津川 IC から 9 日早朝帰宅。

黄葉が真っ盛りでしたが、朝は霜も下りて山の冬はもうすぐそこに来ています。

お世話になりました 柏 敏明

2012 年 10 月 16 日

駒王では、色々とお世話になりました。



解散後、赤沢森林鉄道に乗り、鈴木頼正先輩に勧めて頂いた、中津川駅前の蕎麦屋「更科」で、美味しいソバを食べて帰りました。又、本日、幹事さんから写真を送って頂き、有難うございました。

KGACの南井さんから、「山嶽寮」寄贈の御礼のメールが届きました。南井さんのご了解を得て、掲示板に転載させていただきます。

拝 復

多少は秋らしくなりほっとしていますが益々お元気にご活躍のこととお慶び申し上げます。この度は「山嶽寮 67 号」拝受いたしました。有り難うございます。

毎年、充実した内容に羨ましく思っていたのですが、今年のは抜群に豊富な内容とKACを愛する皆様の心意気がひしひしと伝わってきました。

まずは山本恵昭さん始め皆さんが国内国外あちこちの山々によく出かけておられることに感心しています。何度か通過したパキスタンのカラコルム・ハイウエー、気になっていたフンザ奥のアッタバード湖の様子も良く判り現状に納得しました。コッシンの山岳鉄道の旅には恐れ入りました。

飯田さんのドロミテ・スキー滑降の劔岳山塊への比喻による的確な表現。

また、貴兄の九州クルージング報告、世界中で最も楽しい旅といわれるヨットの楽しみを知ることができました。それにしても毎日うまい物を食べて、うまい酒飲んで、内外地元の良い仲間達と歓談して素晴らしい人生、至福の毎日ですね。

また、アメサンの勉強家振りと博識には脱帽です。

最後になりますが伊藤ノンキさんのご冥福をお祈りしています。ノンキさんとは大関邸での花見会で数回お会いし色々楽しいお話を伺っていました。

素晴らしい大先輩を失われたことはKACにとっては大きな打撃ですね。今年の4月、大関邸で焚き火の火をくべながらグリーンさんが寂しそうにしておられたのが印象的でした。（中略）

益々のご健勝をお祈りしています。まずは御礼方々感想まで。

敬 具

2012 年 10 月 15 日

南井英弘

後立山

森本

2012 年 10 月 17 日

10 月 6 日から 10 月 10 日にかけて立山室堂～一の越、東一の越、黒部湖～扇沢、針の木雪渓～針の木岳、赤沢岳・鳴沢岳・爺が岳～扇沢と歩いてきました。

天狗平の紅葉、後立山の稜線と天気恵まれ快適な空中散歩を楽しんできました。

岩小屋沢岳から真正面に見える劔岳、遠くには槍、穂高連峰が。その向こうには富士、八ヶ岳と 360 度の大パノラマでした。

針の木から鹿島槍のパノラマ 後に見えるのが劔、立山連峰です。



京都の西山

廣瀬健三

2012 年 11 月 2 日

先月 25 日、地藏山と竜ヶ岳に登りました。会合う人もおらず、静かな山道、数度の急登も全く気にならず、快調そのもの、大変悦にいました。

ところがです、首無し地藏からの清滝への下りで、急に足にガタがきて、崩れるようにこけてしまう始末。川を 3m ほど見下ろしてのトラバースの箇所ではついに立てなくなりました。ここで落ちたらがするなと、思った瞬間へなへなと腰を下ろしてしまいました。最後尾の人が異変に気が付き、平地に着くまで付き添ってくれました。嗚呼おじんになりけり。平地に降りてからの 40-50 分の歩きはほとんど問題なく、いったいあれは何が起こったのだらうと不思議に思ってます。その次の日は太ももに張りが残りましたが元気にテニスができました。同行の JAC の親しい人からは”日頃足使うテニスやっとなのちゃうの！”とひやかしとも同情とも取れる言が出ました。最後の急

降下を控え、リーダーから”これからの下りは相当きつく、日暮れになるかもしれないので、愛宕山山頂経由のE S C A P Eルートを希望者がおれば別途考えます”との事だったので、小生は即座にこれを選びたいと申し出ましたが、他に誰もおらず実現されずでした。小生3月に、下りで大転倒、急な下りは要注意と思ってましたし、視力が落ちて、特に下りの段差の感覚が掴めず難儀中なので、愛宕山経由を希望。眼科に行くと白内障が相当進んでる由。そういえば難なくこなしていたTENNIS BALLの返球ができなかったりしていました。下りの時こけまいと必要以上に踏ん張りすぎた事も一因かもしれません。山に登れば下り有りは必然。桑原くわばら。

新雪の穂高 松下哲夫

2012年11月13日

11月3日から4日新雪の穂高を觀に徳本峠へ行きました。3日凍て付いた上高地にアイゼンが要るかもと思いながら雲におおわれた明神岳を横目に徳本峠を目指して雪道を登りました。峠に約1時間寒さに耐えながら雲が切れるのを待ちました。新雪の穂高を觀ることが出来ませんでした。徳沢園で1泊し翌4日は朝より快晴で今日は絶対に好い景色が期待出来ると再度、徳本峠に登り觀られた景色の写真を投稿しました。



ちなみに、4日の徳本峠の登山道は3日より凍った場所が多くアイゼンを持って行かなかった事

を反省しました。

丹沢・爺様の遠足 越田和男

2012年11月16日

一昨日、米山バブさんの発案で、越田が場所決め、平井センキチ、飯田も参加して、オジン4人組で晴れた秋の一日を丹沢の烏尾山 1136m で楽しんだ。

登り口は、水無川の古い林道をつめた新茅山荘前の駐車場。2〜30年前にしょっちゅう通った、未舗装でガードレールもあまりない気分の良い林道だが、随分長く感じられた。登り口から山頂まで、標高差650m、2時間の登りだが、これもまた、以前と比べようもないほど長く急峻に感じられた。元気なバブさんと超ゆっくりの越田では、少々のは差はついたが、なんとか休憩込みで2時間半で登り切った。

烏尾山荘は健在で、小屋の主か、アルバイトの人かは聞かなかったが、我々の登山中にダブルボックで重荷を担ぎあげているのに出あった。きっと山小屋に泊まって星を見ようなどと、週末には山ガールで賑わうのだろう。

紅葉には一寸早かったが晴天に恵まれ、山頂からは360度の展望。富士の北東面も間近に、伊豆の山々、真鶴半島、相模湾などが楽しめた。風が少々きつくあまりゆっくりと山頂でのワイン付きランチを楽しめなかったけれど、まずまずの満足度。計画ではさらにひと登りして、三ノ塔 1205mまで足を伸ばすつもりではあったが、その山頂を見上げただけで皆さんギヴアップ。

転ばぬようにゆっくり慎重に下山の途につき、1時間半後に無事駐車場に帰りついた。

元気なバブさんは、このあと銀座に直行して夜の部をこなすとのことだった。

雨のカニ・キノコ 山本恵昭

2012年11月19日

生憎、雨のカニ・キノコ会となりました。

土曜日早朝、平井さんと合流して小雨の中、林道を車で上がっていくと、路面に積雪が。平井さんの前輪駆動車ではスリップしたので、うちの一応四駆に乗っていただいて行ける所までと進む。それも束の間、畑ヶ平よりかなり下で車の腹がつかえて進めなくなる。

何とか車の向きを変えて駐車し、林道沿いを散歩。積雪 30cm ほどで、長靴に傘というスタイルで倒木を見つけては雪を掻き退けキノコ探し。さすが大森さんがナメコを少々発見。雨もひどくなってきたので、早々に切上げて下山。車で下っていると、松成さんと合流。浪川さんと武田さんに娘の携帯で連絡し、浜坂港へ向かう。

サブメニューのつमりのカニ祭りに行くが、人一杯、雨ザザ降り、無料のカニ汁終了と、良い事無し。浜坂駅近くの食堂で昼食を食べて、浜坂温泉で温まる。

買出し後、キャンプ場を覗きに行くと思いの外、炊事場を無料で使わせてもらえることになった。雨の中有り難い。

明るいうちから、香住鶴で喉を潤わせながらセコガニでスタート。武田さん、浪川さん、柏さんも適宜合流されて、下見で収穫した冷凍キノコと大森さんの獲物を入れてカニ・キノコ鍋、そのうち炭もいこって焼きカニと、いつものフルメニュー。いつもながら、気の良いメンバーでウダウダと雑談が楽しい。それぞれ順次出来上がって、車中泊。

日曜日、競りはカニの漁獲が少なかったようで、例年よりは小ぶり、数も少ない。大森さんに仕掛けていただいて、家路に。

ご参加の皆様、有難うございました。来年に期待しましょう。

カニ・キノコのお礼 大森雅宏

天気はもうひとつだったんですけどね。今年も楽しくおいしく過ごせてありがとうございました。

カンさんがおいででなかったことや、いつ

もの塩崎さんのお顔がなかったのは少しさびしいのですが、若手の松成君(30代!!・私も若いときあったんですけど)や山本JR(20代!!!・もう忘れてますね卒業したてのころ)のご参加もあって、楽しい時間でした。

武田会長はじめ皆様ありがとうございました。山本リーダーには毎度お世話になってこちらもありがとうございます。

カニ・キノコのお礼 平井幹男

今回は天気が悪い中、楽しい一時を過ごさせていただき有難うございました。特に山本君には何から何まで準備していただき申し訳ありませんでした。大森君のいつもながらの見事な仕分け、武田さんの豪華な差し入れ、焼きの浪川さん、話題豊富な柏さん、若手の松成君、紅一点の山本嬢と楽しいメンバーの宴会となりました。僕は息子に四駆の争奪戦に敗れ、林道でスリップの連続、来年は必ず争奪戦に勝つと心に誓いました。来年のスズコ、カニ・キノコでの再会を今から楽しみにしています。まずは、お礼まで

ありがとうございました matsunari

初めて参加させて頂き、有難うございました。

日ごろの鬱憤を晴らすべく、平井さんのバラントインを空けてしまい申し訳ございません。武田さんが差し入れて下さった鹿肉とバラコが非常に相性が良くどちらも美味しく頂きました。

今回参加させて頂き色々新鮮な事がありました。浜坂という、カニで有名な産地でもロシア産のズワイの方が安いのに驚きましたし、そもそも隣で売っている事にも驚きました。

生憎の道路事情で集合場所にも辿りつけず、キノコも取れなかったのは非常に残念でしたが、大森さんが苦勞して採取されたキノコ、山本さんが以前採取されたキノコを頂くと当たり前ですが、スーパーのよりも格段に美味しかったです。また、是非参加させて下さい。

雨の摩耶山

山本恵昭

2012 年 11 月 24 日

せっかくの 3 連休ですが、諸般の事情で遠出もできない。

今朝、新神戸へ出迎えの仕事があったので、ついでに摩耶山に登ってきました。ちょうど行われていた六甲全山縦走のトップグループのペースにつられて、新神戸から摩耶山まで 1 時間 40 分ほど。自分でもなかなかのペース。須磨浦公園から頑張ってきた方々を抜いていくのは、N 氏的快感でした。

生憎の雨の中、山頂の東屋は暖かい飲み物や食事を用意したサポートメンバーで一杯。隅っこでラーメンを作っていると、見ず知らずの方からホットレモンをご馳走になりました。

コーヒーで一息入れて新神戸へ下山しようと思うと、ちょうど、全山縦走のピークのタイミングと重なり登ってくる人の大行列。

仕方がないので、地藏谷経由で下山。誰にも会わない静かな山の中、足元は黄金色、山肌はパッチワーク。様々な木々の黄葉、紅葉がとても美しかったです。

市が原まで下りて来ると人だらけ。トイレは大行列。新神戸駅も人だらけ。

喧騒と静寂の極端な 1 日でした。

茨城の山ふたつ

越田和男

2012 年 11 月 24 日

今週（11 月 21～22 日）は秋晴れのもと、茨城の山を歩いてきました。茨城県の山といえば、筑波山くらいしか思い当たらない方が多いでしょうが、今回歩いたのは、袋田の滝で有名な久慈川上流域、奥久慈の山々です。会社仲間との一行三名。泊まり場は、山中の一軒宿「湯の澤鉱泉」（@¥11,000-）まずまずでした。

初日は、宿の近くで名前につられて選んだ「熊の山 310m」。久慈川左岸の段丘上の静かな山里から標高差 250m を小一時間。頂上直下 210 段の急な

石段を登り切ったら、見晴らし抜群の頂上に着いた。小さな神社があり、山名は熊の山だが、神社名は熊野神社だった。南西方向に筑波山、同じ方角に遠く富士山が望めるはずだが、この日は霞んで見えなかった。その代わりと言っては何だが、川を挟んだ対面に、小さいながらも富士山様の 361m の小ピークがあり、土地の人は盛金富士と呼んでいるらしい。

翌日は、やはり久慈川左岸の、断崖絶壁で有名な「奥久慈・男体山 654m」。修験道の行場だったらしく、南麓に古分屋敷だとか大円地とかの古風な名前の集落がある。見上げる南壁は 200m くらいはあろうか。一般ルートは、東の鞍部の大円地越を経て、稜線をつたうもので、我々向きだが、南面はストーンと切れており、要所には「転落注意」の標識がある。標高差 450m くらいで、2 時間で登れた。人気のある山らしく、平日なのに地元のハイカーが多かった。祠のある頂上には、無線のアンテナもあって無粋だが許せる範囲で、紅葉の残る晩秋の眺望を楽しんだ。

飲み会

塩崎将美

2012 年 12 月 9 日

有志が集まり梅田（新地と言いたい所ですが第三ビル）で忘年会をやりました。一番上はカンさん、一番若手は恵昭君。



武庫川～六甲山～三宮 西濱昌典

2012 年 12 月 12 日

1 ヶ月前に父が他界し、私が初めて父に連れられて登った山道である「高座の滝～山頂」のルートを追悼山行しました。自宅の武庫川団地から六甲山山頂を経てハーブ園、三ノ宮駅とジョギングと歩きを交えて約5時間、足攣りまくりのへろへろ山行でした。

台湾の山旅

山本恵昭

2012 年 12 月 31 日

12月23日～29日、妻と台湾に行ってきました。

まずは、台湾中部の阿里山周辺で、紅檜の神木群を見学。樹齢2700年、壁のような巨木から生命力をもらった感じです。また、大塔山2663mに登ったり、越田さんではありませんが可愛い阿里山森林鉄道にも乗ってみました。



もう1ヶ所の目的地だった拉拉山の神木林には、タクシーチャーターしか行く方法がないとのことでした。その代わり、鉄道とバスを乗り継ぎながら台湾を一周してきました。夜市で屋台の台湾料理を食べまくり、太魯閣溪谷で岩壁をくり貫いたトレールを歩いたり、温泉や冷泉に入ったり、あっちこっち寄り道の旅を堪能しました。

台湾の人は、親切でやさしい方が多く、色々なところで助けていただきました。

年末年始の山歩き 越田和男

2013 年 1 月 8 日

相変わらずアルピニズムなどとは縁の遠い安易な山歩きを続けています。今年もそんな山歩きと辺鄙なところへの旅を楽しみたいものです。よろしくお付き合いの程を。

暮れの27日～28日はJAC図書委員会の仲間（平井センキチを含む）6名で西伊豆に行った。

天気に恵まれず、山を歩いたのは初日のみ。戸田峠の駐車場から西伊豆スカイライン沿いの稜線歩きで達磨山982mへ。駿河湾越しの富士が望めず残念なるも、360度開けた山頂での祝杯はそれなりに満足のいくものだった。車の回収に峠にもどった2名の他は、さらに稜線を南下して、伽藍山の駐車場で車と合流した。

その後、仁科峠経由で山間の瀬宜の畑温泉の集落に至り、廃校となった小学校の校舎を利用した西伊豆町営の『やまびこ荘』に泊まった。一泊二食付き5450円。猪の肉が手に入ったというので、シン鍋を追加注文したら、これが美味。源泉かけ流しの温泉もあり、納得の宿というべきか。25mプールには温泉が引かれており、湯煙を上げていたが、さすがに寒そうで誰も泳がなかった。

新年の山歩きは家内と表丹沢の高松山801mへ。御殿場線の山北から北東に入る谷の林道の5～6キロ先に、ひっそりとかつての開拓村高松の集落がある。小学校は廃校になっていたが、新築の家があったり、家内工業的な小さな工場もあったりで、今も健在だ。この集落の上部の尺里（ヒサリ）峠、別名「大六点」550m、にまで車を入れたので、山頂までは小一時間だった。西・南面が開けた山頂からは、富士の裾野（この日も山頂は雲の中）、愛鷹連山、箱根の山々、相模湾などが望めた。快晴とは言えないが、雨や雪の心配もなかった初山歩きは、今年の山と旅を暗示しているようだった。

大山一般ルート山行 西濱昌典

2013 年 1 月 8 日

1月2日の1日だけ休みがあったので大山へいつもの友人と行きました。冬山まったくの初心者

も連れて行きました。

当日は冬型が強くなり稜線は強風の為、北壁登攀を止めて一般夏道を行きました。

メガネ無しの出帽無しでとっても目が痛く寒かったです。でも楽しかったなあ。

昨日、結婚しました。

雪見会のお礼 山本恵昭

2013 年 1 月 21 日

飯田様、雪見会参加の皆様

今年も楽しく参加させていただき、有難うございました。

19 日は、浪川さん、谷くん、山田さん（神戸大）、私の 4 人でスキーツアーに。天狗原の東端から親沢源流へ急斜面を滑り込み、ひたすら沢沿いに下ってヒヨドリ峰からの合流点で大休止。シールをつけて若栗へ登り、黒川沢の深雪経由で白馬乗鞍スキー場まで。後半、ガスで視界が悪かったので苦労しましたが、変化に富んだコースでした。

20 日は、チベットでお会いした長野県山岳協会のメンバー、浅川さんとゲレンデで再会。シニア競技会に向けての練習中とのことで、誘われて急遽ポールレッスンに参加。オーストラリアからのスキーヤーも交えて、賑やかに楽しみました。

1 泊ではあつという間の雪見会でしたが、充実の 2 日間でした。

雪見会お礼 谷 勇輝

雪見会参加の皆様。

19 日日帰りということで、本当に短い間でしたが、楽しく参加させていただきまして有り難うございました。

久しぶりの山スキーに苦戦しましたが、充実した山行きでした。浪川さん、山本さん、山田さん（神戸大）お世話になりました。

飯田様 今年も大変お世話になり、有り難うございました。来年も楽しみにしておりますのでよろしくお願いいたします。

（無題） 山本恵昭

神戸大 HP に山田さんの雪見会スキーツアー報告を載せられています。一度ご覧ください。

（「「梅池・雪見会」スキー報告 ACKU」で検索可 編集）

七曲滝

塩崎将美

2013 年 1 月 28 日

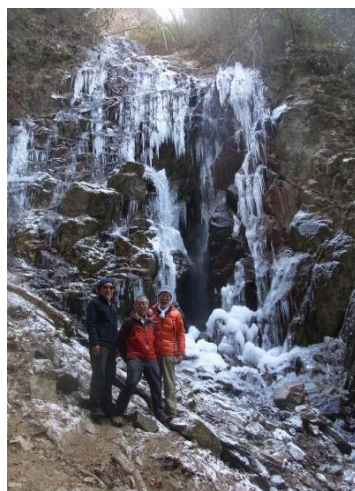
滝を見に行ってきました。参加メンバーは安井、井上、塩崎。

六甲ケーブル下駅に集合、多くのハイカーがケーブルに乗り込んでいる。乗るか歩くか、歩くか乗るか、乗りたい気持ちを抑え歩き出す。

若い時は 1 時間を切って登った油コブシの登りに 1 時間 30 分かかる。ゴルフ場横を歩き 1 時間で極楽茶屋跡に到着。おでんで熱燗を飲み、締めに鰻鮓、ほろ酔いで紅葉谷を下りました。下りは結構雪が残ってました。

滝は完全氷結に程遠くイマイチ、2 時間 30 分で有馬温泉。温泉はやめて立ち飲みで一杯やり解散。

天気に恵まれ風もない冬の六甲を楽しんで来ました。



梅池ー白馬岳(敗退) 西濱昌典

2013 年 2 月 17 日

2 月 9 日&10 日友人と計 2 名で梅池から白馬を狙いました。

9 日 12 時過ぎにスキー場に入って友人から借り

た山スキーを履いてゴンドラ終着駅まで。14時半からスキーにて入山、天狗原に17時着、幕営。10日朝から冬型で曇天、白馬乗鞍までスキー、強風。そこから山靴に履き替えて稜線へ抜けて30分ほど歩くも強風の為11時半にヤンピ。そこで昨年他界した父遺骨を散骨して引き返す。一昨年にスキーにて膝十字靭帯を裂傷したのでスキーを担いで天狗原まで戻り、そこからパウダースノーをボーゲンで下り駐車場に戻ったのが17時過ぎでした。

久しぶりの冬の北アルプス稜線の風を楽しめてよかったです。

富士山に登った!!! 越田和男

2013年2月27日

一昨日(2/25)、晴れた一日、横須賀郊外の里山歩きを高齢会社仲間の5人と楽しんだ。

標高183m、通称三浦富士。ちょっと低いが国土地理院の5万図にはちゃんと「富士山」となっている。三浦半島の南部に東西に走る山脈があり、東端の富士山から砲台山204m、更に武山200mと繋がっており、これを西から大縦走する。竹川バス停から京急津久井浜駅までの2時間強の快適な山歩きだった。

武山への林道の登りを過ぎると、あとは山道で尾根筋のアップダウンとなり、山歩きの気分。砲台山には、東京湾の入り口と相模湾に睨みを利かせた、戦時中の頑丈な砲台跡がほぼ完ぺきな姿で残っていた。浅間神社を祀る183mの富士山頂から3776mの富士を眺めるのを楽しみにしていたが、あいにく雲が邪魔をして果たせなかったのが心残りとなった。

帰路、久里浜駅近くで、まだ3時だというのに営業中とあった焼鳥屋の2階に上がり込んだら、なかなかのまじめな気合の入った店で、生ビールと本格的各種焼き鳥を堪能するというオマケがついた。

富士山 福田信三

越田さん、“富士山に登った”に興味をひかれ

調べてみました。

日本全県はおろか、台湾、アメリカの果てはチリにまで“**富士”がありました。

これらは郷土富士と呼ばれるとのこと。その多くは山容が「富士山」に似ていることから「富士」と呼称されます。ほか、歴史的に「富士山」と何らかの関係がある山や、その土地の代表的な山に「富士」を付したものもあるようです。

関東地方周辺には人工の築山に「富士」を付して呼ぶことがあります。(「富士塚」)

日本人の富士に対する気持ちってすごいんですね。

Re 富士山 越田和男

福田さん、郷土富士情報有難うございました。まだ勘定してませんが、200近くありそうですね。

全国の富士を全部登ることを目標にしている物好きの方も居られるとか。

わたしはそんな趣味はありませんが、アメリカ西海岸で、二つの富士に登った思い出があります。

1966年の夏のことでした。

「アメリカの富士山=Mt. セントヘレンズ 2950m」(ワシントン州)

「オレゴン富士=Mt. フッド 3429m」(オレゴン州)

どちらも、氷河を抱えた立派な独立峰で、アイゼン、ピッケル、ザイルの世界でした。Mt. セントヘレンズはその後の大爆発噴火で上部が吹っ飛び、現在に高さは2550mと400mも低くなってしまいました。従って、もう誰も真似できない、と変てこな満足に浸って居ります。

富士山 飯田 進

退屈しのぎにパソコン見ていたら、富士山の数、340あるそう。中島信典さんという人が18年かけて全国まわって調べたとかで、おらが富士340という本書かれたそう。

残しておきたい書き込みあれこれ

日経新聞に氷河のこと 大森雅宏

2012年4月7日

昨年暮れに『今日の日経新聞に「剣岳、国内初の氷河か」という記事が出ていました』と、書き込みました。その続き。

4月5日掲載の記事を添付します。学会誌に掲載されたのでお墨付き、というような中身です。

真砂のテントで「♪♪ 氷河のほつりを滑りてゆけば」と歌っていましたが氷河は近くにあったんですね。(画像省略 編集)

日経新聞に氷河のこと 越田和男

朝日新聞にも出ていました。

我が国の雪氷学者、登山愛好家にはどうやら氷河願望というのがあるようですね。小生もこういう記事は気になるところ。小窓雪渓や三ノ窓雪渓といえば、今となってはもうよう行きませんが、現役時代には通いつめたところ。万年雪か氷河かなどあまり気にしてなかったのですが、なつかしいですね。

日本にも氷河がある、日本の氷河を観に行こう、日本の氷河を歩こう、などのキャッチフレーズで観光ツアーが組まれたり、氷河横断の観光リフトが掛けられたり、そんなことのないように祈ります。

今日の午後は海老名の大関邸での花見の宴です。こんな話も話題に登ることでしょう。

日本の氷河 田邊 潤

氷河と言えるのかどうか判りませんが、その昔「デカ福」の遺体搜索に「小窓谷」に何回か入りましたが、10月か11月の小窓谷にはまだ末端で数10メートルの高さの雪渓が残っており、その年中には融け切ることはあり得ないので、それを乗り越えることができず搜索を打ち切った経験があります。氷河と言えるかどうか

専門外の私には判りませんでしたが、日本海側の小窓谷には確実に残雪が毎年残るものと推察されます。これをもって氷河というなら、日本にも小規模ながら氷河が存在することを私は信じます。

飽くなき挑戦

廣瀬健三

2012年5月29日

去る5月26日、平生記念セミナーハウスで松下弘幸KAC会員の講演あり。(甲南高校同窓会での記念講演) 掲題は演題ですが、話はカーレースに終始、彼のレースに賭けた意気込みが半端な物でなかった事が、良く分かりました。51歳になった今も、レースに出る気構えを保持している模様で、此のしぶとさは山岳部で培った精神がベースにあるのか、偉大な祖父幸之助の血筋なのか、驚きました。斯界でのエピソードに皆さん喜んでいましたが、小生は彼が何時、甲南中学／高校で籍を置いた山岳部の事に触れるかと、待っていました。活発に行われた、質疑応答の時の”今の甲南高生をどう思う”に対して、”自分は山岳部に在籍した。会報にも寄稿した”との語りが少しありました。もっとも印象に残ったのは、カーレースでトップになるには(1)車の性能—テニスではプレイヤーの持つラケットの性能は勝敗に殆ど関係しないだろうが—(2)レーサーの気迫—と言う話;競っている時、こいつは今日は気合が入っている、何か気後れすると思った時は絶対勝てない。技術より気力が決め手との事、此の気力が落ちたので一旦引退したとの事でした。

帰ってきました

田邊 潤

2012年7月5日

フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デ

ンマーク、ドイツ、オランダと約1ヶ月の旅を終えて昨日帰ってきました。フィヨルドの期待は見事にはずれませんでした。それだけを目的に旅すればよかったのではないかと思います。それでもまだスキーを担いだ女性が列車に乗ってくるなど、日本では考えられない寒さでした。秋にはオーストリーの田舎を旅する考えでおります。

スコットランドの旅から

越田和男

2012年7月8日

昨日スコットランドの旅から帰って来ました。覚悟の上とはいえ、雨ばかりで寒かったです。雨男の本領発揮で、結局最高峰のベン・ネヴィスの山頂も望むことが出来ませんでした。大正時代の辻村伊助が「ハイランド」で述べた紀行文でも結構雨ばかりだったようで、しょうがないか、と諦めて、地ビールばかり飲んでました。

レンタカーで、あちこち走りまわりましたが、2週間の滞在中、半日以上晴れたのは二日のみ。イギリス本島最北東端のジョンノー・グローツの断崖絶壁と、その上の草原で草を食む羊の群れや、観光地化されてはいるが、ネス湖畔の城跡などが印象的。

高校時代に愛唱した歌に出てくる「ロッホ・ローモンド」は、大都市グラスゴーに近く、ちょうど夏休みに入った最初の週末だったもので、なんだかごったがえしていた印象でした。

スコットランド人口500万人の内の1%以下の人たちしか話さないゲール語が、今も大切にされており、地名表示などはきちんと英語と併記されてました。山は見れなかったものの、それなりの旅情は味わえ、スカイ島で乗ったタクシーの運転手は、小学校出るまで英語を知らなかったとか。

数あるモルトウイスキーの蒸留所めぐりなどは避けて、「マンカラン」のみ狙い撃ちしたつもりが、着いた時刻では工場見学は終わったあとで、ドジなことでした。

『戦火に散った岳人たち』

越田和男

2012年8月19日

以前(2010.9.25),この掲示板で紹介した『十五年戦争下の登山』(本泉の泉社 2010年)の著者・西本武志氏がこのほど、その追補版として標記を私家版で出された。

各山岳団体ごとの戦没者名簿の追加・訂正には小生がお手伝いした。旧制甲南高校山岳部出身者の8名の方々のお名前(楠木義昭 湯川孝夫 喜多又太郎、加藤弘三 多田潤也 村上正太郎 藤澤浩 田口六郎の各氏である)と、わかる範囲での戦没年月日、戦没地、更にそれらの出典をまとめて、故伊藤文三さんにご確認頂き、西本氏に提供したものが、このたびの増補版に掲載されている。

また、今回掲載された写真のなかには、甲南から東大に進まれた故喜多又太郎さんが、東大パーティとして、渡辺兵力さんや高木正孝さんらと不帰一峰尾根を登られた時の珍しい写真もあった。

西本氏からは、終戦記念日の翌日に送られてきた。改めて終戦直後にロックガーデンに甲南山岳会の追憶のレリーフを作るきっかけのなったという戦没会員の霊を追悼した次第です。

ヤマビルの話

越田和男

2012年10月19日

先日の甲南バットレスの話の中に蛭の心配する気配が全くなかったので、関西はいいなと思ってしまいました。関東の低山のヤマビルの繁殖は年々ひどくなっているようです。山麓のバス停には、車内に蛭を持ちこまないようにとの注意書きがよくあります。

実は、先月中旬ですが、群馬県北部の低い山(石尊山 1049m)登ったときのこと。登山口の駒岩という集落の公民館の前に駐車して、山歩きの身支度をしていたら、土地のオバサン二人が何やらもの

言いたげに近づいてきた。曰く、ヒル対策は出来るのかと。

「最近の蛭は尋常じゃない」

「スプレーは持って来たけど」

「そんなもの役に立たない」

塩を持って行けという。今更そんなこといわれても思っていたら、オバサンは 200g 位に小分けしてポリ袋に入れたものをたくさん用意していて、各自に配ってくれた。蛭に食いつかれたら、ひっぱらずにナメクジ退治のように塩まぶしにすべしと。その上に、この山にはヘビも居る、マムシもヤマカガシも、熊も！とっておどかされ、仲間の一人はここで山歩きをギヴアップ。残る 4 人も何だか出鼻をくじかれたが、あきらめる訳にもいかず、暗い気持ちでの出発となった。

集落を抜けて山道に入るところには、蛭注意の看板があり、塩水の入ったスプレータンクが備えてあった。有難く足元に塩水を掛けまくって、樹林帯に入ったら、やっぱり居ました居ました。小生トップを歩いたので被害なし。2 番手、3 番手がやられるのが常識だとのこと。自然とみんなの足が速くなり、樹林帯を抜けるまでゆっくりリュックを置いて休む気にもならず、先を急いだら息が切れた。

下りも同様、樹林帯はひたすら駆け抜けた。途中携帯が鳴る。何だと思ったら、麓に残った仲間からで、オバサンが待っているの下山時間を知らせよと。集落に辿りつくや、待ち構えたオバサンが皆の靴を脱げとって、裸足にさせられた。ヤッパリ居ました居ました。みんな足元に数匹が喰らい付いていました。小生こんな所で靴を脱ぐのが面倒なので、駐車場に行ってからにするといっても許してくれない。パンツまで脱がされそんな勢いで抵抗できず。

なぜかとも強引なのか。聞けば集落に蛭を待ちこまれないようにしているのだとのこと。自己防衛と親切に感動して温泉地へと急いだ。以前、妙

義山の麓を歩いたあと、温泉に着いて浴衣に着かえる際に吸いついた蛭を発見した経験もあったが、今回はお陰でそのようなことはなかった。

岳人に山嶽寮

井上 知三

2012 年 11 月 17 日

一昨日、岳人 12 月号が届きました。会報ノートに山岳寮が紹介されていたのでご報告いたします。確か一昨年にも取り上げられたように思います。みなさん是非ご覧になって下さい。

甲南山岳部の O B 会の会誌。会員もだいぶ高齢となり、山行記録よりも、年齢に合った軽登山や観光をかねたトレッキングが増えていくという。そんな内容もこれからのリタイア組には参考になる。まず巻頭は追悼。戦前、戦中期の穂高で活躍し、鹿島窟荒沢奥壁南後の初登攀者、伊藤文三さんの思い出など。

山行編では、2011 年 8 月の
後半では「単独行 転落 極限行を考へる」という論文。長谷川恒男、ソロクライマーの中嶋正宏と鈴木謙三、メスナーなどの登攀を取り上げている。
〒560-10052 大阪府豊中市春日町 5-1-13 201 井上



甲南山岳部・山岳会
『山嶽寮』第 67 号
B5 判 123 ページ

光岳リンチヨウ沢。キナバル登山。赤石沢から赤石岳。
山岳鉄道の記事が楽しい。1960 年代から世界各地で乗った山岳鉄道を紹介。ヨーロッパのほか、カナダ、ニュージーランド、インドのカルシヤンダーダージリンを結ぶダーズリンヒマラヤ鉄道、中国の西蔵鉄道、南嶺鉄道（カシユガル）吐魯番など、見事な車窓展望についての解説付きで、ずらりと並ぶ。

206

モーリス・エルゾーク死去 越田和男

2012 年 12 月 16 日

昨日の朝日の夕刊で訃報に接しました。享年 93 歳。

名著、当時のベストセラー「処女峰アンナプルナ」に登場する隊員のほとんどが亡くなられたことになりますね。高校生の頃、この 1950 年のフランス隊による初めての 8000m 峰の壮絶な初登攀物語に興奮させられた思い出があります。

我々の年代のものは、今でも物語の登場人物、リーダーにして初登頂者のエルゾークと、ルイ・

ラシュナル、そしてリオネル・テレイ、ガストン・レヴィファー、ジャン・クジー・・・あたりまでは、すらすらと出てくる方が多いことでしょう。

当時のメンバーでヒマラヤ再訪者となったのは、マカルーに初登頂したリオネル・テレイとジャン・クジーぐらいでしょうか。

エルゾークの死去で8000m初登頂時代も遙か昔の歴史の彼方となりました。

KAC水野健次郎さんとM. エルゾーク

廣瀬健三

昔、今は亡き健次郎さんとエルゾークの交遊話が日経に写真入りで大きく載ってました。その記事为先般から探すも、ついに見つからず。

”凍傷で指が欠けてるので、特別のゴルフバターを贈った。チェルビニアで一緒にゴルフを楽しんだ” 30 年程前の記事。チェルビニアは小生の記憶違いかも。エルゾークは当時フランスのスポーツ大臣、水野さんはミズノの会長。そんな事で、KACと甲南関係のスクラップや写真を沢山見直しました。カンロク森本兄が 10 年ほど昔に、鶴木と行った西堀栄三郎探検の殿堂で撮ったウノキの写真など出てきました。この殿堂には、先月山歩きの帰りに、平井一正先生やJACの人たちと行ってきました。西堀氏がヨットにも凝っていて、息子さんと二人で大型ヨットを造ったことを知り、ビックリした次第です。

謹賀新年

福井グリーン

2013 年 1 月 1 日

甲南山岳会の皆さん明けましておめでとうございます。

晴らしい山岳会に在籍できた事をあらためてよかったと、思います。

同時代の方々が少なくなつて、なんとも言えない気持ちですが、続いて皆さん方が元気に活動しておられるので、ホッとして、毎週、掲示板を拝

見しております。今年もよろしくおねがいします。

落ちる

平井幹男

2013 年 3 月 6 日

いささか山とは関係が無くても申し訳ありませんが、現役の頃、岩を登っている時、手掛かりも足がかりも無く足がミシンを踏みだし、このまま手を離して思い切り空中へ飛び出したい衝動に駆られた経験をお持ちの方々もいらっしゃる事と思います。

今回機会があつてオーストラリアのケアンズ近郊で 10000 フィート(3000m) 上空よりインストラクターと共にくっついて飛ぶ、タンデムスカイダイビングを経験しました。セスナで 10000 フィートに達するとセスナの横の扉が開き、座った姿勢で飛び出します。20 から 30 秒フリーホウルとにかく地上に向けて落下、あっという間に 1000m ほどを過ぎやっとパラシュートが、確保練習の衝撃の倍程度のショックを伴って開きます。テレビの映像とは違い結構なスピードで地上に向かって旋回してポイントを目指して降下、そして無事着地。この間約 15 分程度。つくづく思いましたが岩登りは引力に逆らつてやるスポーツで、間違つてもアイガーの頂上からは飛び降りないと心に誓いました。

甲南歌唱祭

武田雄三

2013 年 3 月 13 日

3 月 10 日正午より平生記念館セミナーハウスで開催の「第 9 回甲南歌唱祭」に参加しました。

山岳会OB の参加は小原・鈴木・広瀬の各先輩方と小生の 4 名、山岳部部歌「山の歌」を声高く斉唱して来ました。

甲南歌唱祭も参加者の高齢化と減少の為廃止となった「全国寮歌祭」と同根、「部歌・応援歌」を持つ野球部・ラグビー部・陸上競技部・山岳部・剣道部の極少数旧制高校卒業生(9 名)と、各部

に関連する新制大・高のOB33名の参加にとどまり昨年より減少、寂しくなった印象で何時まで続けられるのか。

小生は「旧制甲南高等学校歌曲集」（昭和42年3月31日発行）の復刻版作成に当たり

1) 山岳会の故香月会長と故徳末さんご夫妻が多
大の貢献をなされた

2) 山岳部の「山の歌」&「雪の歌」・野球部の
応援歌・蹴球部の部歌作詞者が山岳会の故伊藤
愿さんで有る

山岳会に取って忘れてはならないと意気を感じ
て参加させて貰っています。

甲南歌唱祭 越田和男

年々参加者数が先細りするなかで、今年も山
岳会から小原、鈴木、廣瀬の諸兄に武田会長も
加わって頂き、安堵いたしております。

80余年も歌い継がれてきた「山の歌」は、当
時の旧制高校生の作った優れた文化遺産であり
ます。いまどきの、良く甲子園などで歌われて
いる高校の校歌の多くの、上からのお仕着せの
没個性的な歌詞とは一味も二味もちがい、山へ
の情熱のほとばしる若き伊藤愿さんの歌には、
いつもながらほれぼれしてしまいます。山の仲
間内で歌い続ける以外にも、少しでも範囲を広
げて、ご披露願えればと思う次第です。

遠隔地在住を理由に私自身は参加せずに申し
上げるのもなんですが、関西在住の山岳会員の
ひとりでも多く方々が参加され、このような催
しが何とか存続してほしいものです。

甲南歌唱祭 廣瀬健三

”あけのみそらに そびゆるみねは ようら
くまとう くおんのすがた”と慣れ親しんでい
る甲南山岳部のこの(山の歌)を久しぶりに、気
合を入れて歌ってきました。小原(おに)先輩
から後で、”瓔珞”の意味わかるかと聞かれてま
した。かろうじて返答が出来ましたが、作詞者
のGEN. 伊藤大先輩が甲南高校生の時に作ら

れたとは、驚きです。今でいうシンガーソング
ライターなののでしょうか。その重厚さの中に、
山岳讃歌が垣間見られますね。

BOURBON 飯田 進

2013年3月16日

昨日コストコ(アメリカ風 会員制スーパー)
でバーボンウイスキーを買ってきました。

銘柄はKIRKLAND。

KENTUCKY FRANKFORTというところ
で造られたアルコール度 51%のバーボンです。1
入り 1900円。

以前コッシンがこれが本物のバーボンやで、と
言ってお土産にいただいたバーボンに似た味で、
実に美味しい。これいけますよ。

Moonshine whisky のこと 越田和男

アメリカの禁酒法時代に、ケンタッキー、テ
ネシー、ウエスト・ヴァージニアなどアパラチ
ア山中の村々で、盛んに作られた密造酒のこと
です。Moonshine で辞書を引けば、「(酒を) 密
造する」という意味があり、作っている連中の
事を Moonshiner というとのこと。何だか夜陰
に紛れてこそこそとやっていた感じが出て楽し
いですね。

この密造酒はその後この地方の伝統となっ
ているらしく、店頭での市販はされていないが、
相当マニアックなオジサン達が丹精をこめて熟
成した逸品が、それなりの販売ルートで入手出
来るらしい。少々高価だが、小生のかつての勤
め先が、ケンタッキーとテネシーに工場を持っ
ていた関係で、退職祝いに現地のスタッフがプ
レゼントしてくれた。

出張先で渡されたガロン瓶を日本に持ち帰る
のは、相当リスクだったけれども、無事持ち
帰って、賞味したらこれが絶品。小ビンに分け
て会社の若い連中に配ったけれど、密造と聞く
だけで敬遠するのが多くでがっかり。ところが、

甲南の山仲間に配ると、バブさん、飯田を始め、皆さん（お世辞抜きだろうと思うが）、うまいまいを連発。苦労して持ち帰った甲斐があった。飯田が書いているのは、まさにこの Moonshine のこと。勿論バーボン系です。

山登りと関係ない話で恐縮だが、山の酒の話なので許されたし。酔っ払いついでにいうと、Mountain Dew というものもある。文字通り「山の滴」だが、この言い方は禁酒法時代より古く、開拓時代からあったようだ。Good Old Mountain Dew なんて、爺様がバンジョー掻きならして歌うカントリーソングの歌詞にもなっている。山の酒はほんとに美味かった

横レス お酒の話 福田信三

横レス失礼します。バーボンのお話ですが思い出したことは、現在上映中の”フライト”デンゼルファンとして観ましたが期待外れでした。

主人公はパイロットで機体整備不備のための大事故を機転で救い一躍英雄となるが、事故直後の血液検査で大量のアルコール反応そのため無期懲役の羽目に。実はこのパイロットはアル中で操縦前日はおろか毎日ウォッカをビンごとラップ飲み、映画の誇張でしょうかとにかくすごい。

しかし、航空会社はこんな状態でも勤務させるという皮肉なんでしょうか。こう思った時、この映画にがっかりしてしまいました。

強いお酒と言えばバーボンでもブッカーズが超60%、強けりゃいいという人にはポーランドのウォッカ、スピリタス、何と96%、ここまでくればお酒かアルコールかの区別はどの疑問発生。

さて、私はドライマティニが好きですが、ステアの時に氷がわずかに溶けたアルコール 40%前後が一番うまいと感じます。それもジンジンに冷えたのがいいですね。

酒 飯田 進

福田君。フンザパニってご存知。パキスタンの桃源郷フンザで造られた密造酒。

もしフンザに行かれたら、そっと交渉してみたら。世の中にはこんな酒もあるんだ、というのが解りますよ。半分アル中の我々が、ひと月近く日干しで禁断状態になっていて、ようやく飲めるくらい、美味しい酒です。

パキスタンのお酒 福田信三

飯田さん。そのようなお酒は知る由もなく味も想像が付きません。多分ワインでしょうか。機会があればと思いますが、まさか大阪のパキスタンレストランには無いでしょうね。

フンザの赤ワイン 越田和男

酒の話のついでに。

かつてパキスタン北部フンザ滞在時にガイドが手に入れてくれた密造赤ワインを美味しくいただいた。

貴重品だと思い、PETボトルに移して計1リットル位を苦労して持ち帰った。

結果、ちっとも美味しくなく、むしろまずかった。話のタネにもならない話ですみません。

フンザ 飯田 進

フンザついでに。「草原の椅子」という映画ご覧になりましたか。フンザでロケされた映画（全編ではなく始めと終わり）そのフンザ周辺の景色で、どこかの谷に大きな砂丘（映画では砂漠と言っていた）が出てくるのですが、何処にあるのか、だれか知りませんか。

フンザでロケされたのは確かです。ウルタルやレディースフィンガーなどが映っています。

フンザ「草原の椅子」 大森雅宏

飯田さんの「フンザの椅子」、景色が雄大ですね。空気の澄み具合・くすみ具合が、「ああ、あんな感じやったんや」と伝わるみたい。スクリーンで見ると迫力ありそうです。いっそ現地に行ってみたらもっと素敵、と思えどチト遠い。

だんだん現実味を帯びてきたリタイア後の計

画に入れましょうか。

で、「ロケ地はどこか」のこと。ネットの安直情報ですが、旅行社のページが目につきました。

「小説の舞台は中国西部のタクラマカン砂漠とフンザでしたが、映画ではタクラマカン砂漠のかわりに北部パキスタンのバルティスタンにある砂漠地帯で撮影が行われました」とありました。そんなページがありましたので御注進。

春です。今年は神戸もサクラが早い。岡本駅の西側、線路沿いの咲き具合が見事だろうと、昼からちょっと見に行ってきます。

フンザ

飯田 進

大森君、お陰様で胸のつかえ取れました。なんとなくスカルドへ行くときの道に似ているなと思っておりました。こちらはてっきりフンザ周辺と思い込んでいたので。

ところでフンザの映画での景観、あんなものじゃないですよ。あれは多分ロケ代けちって滞在時間が短く、天気が悪い間に撮影したものでしょう。フンザからはラカポシ、ディランなどの高峰がホテルの窓からでも見ることができます。もちろんウルタルはホテルの背後にかぶさってきております。リタイア後の計画に最適です。

〇 〇

お 知 ら せ と お 願 い

部室棟の取り壊しについて (お知らせ)

大学グラウンドの東端にあります体育会系の部室棟が取り壊されることになり、学生部より部室明け渡しの連絡を受けました。平成 25 年 8 月 24 日平井会長はじめ有志の皆さんで備品の片づけを行いました。詳しくはホームページ掲示板書き込みをご覧ください。

(8/9「淋しいお知らせ」・8/24「部室の写真」ほか。来年の山嶽寮にてもご紹介の予定です)

山 岳 会 会 費 に つ い て (お 願 い)

ご承知のとおり山岳会は会員諸兄から寄せられる会費によって運営されています。例年の支出は印刷費 20 万円・通信費 10 万円・消耗品 1 万円・各種会費 6 万円にその他を加えて 40 万円程度です(概数)。一方、会費収入は例年 30 万円程度(同)で、以前からの剰余金を取り崩して赤字を埋めています。大きな支出である山嶽寮の印刷費についても、担当の作業により編集にかかる費用を圧縮するなど努力を続けておりますが、このままではいずれ行き詰まることは明かです。

このような状況をご賢察いただき、会費の納入につきましては格別のご理解とご協力をいただきたくお願いいたします。

なお、平成 25 年 4 月の山岳会総会で、一定期間会費納入にご理解をいただけない場合、お送りする各種印刷物にて区別を図ることといたしましたのでお知らせいたします。

(本誌 48 頁『総会「事業報告」から *4 長期間の会費未納者対策』をご参照ください)

編集後記

64号から67号までご担当いただいた福田さんから編集を引き継ぎました。その前の何号かの作業を担当していましたので仕事の流れは覚えているつもりでしたが、誤字もレイアウトの不統一も不出来はいくつも残っています。スタイルの不出来は内容の秀逸さに免じてご容赦ください。アタマは頼りないシテは遅いしとさっぱりでしたが、ともあれ期日内にお寄せいただいた原稿のおかげで木曽福島の集会に間に合わせることができました。原稿をお寄せいただいた皆様にお礼を申し上げます。

掲示板書き込みダイジェストで多くの素材になりましたホームページの塩崎マスター、秋と春の会員短信をまとめてくださった事務局の井上さんにもお礼を申し上げます。

ところで先日、歴代の報告・時報などの編集後記のコピーを目にする機会がありました。当時の編集ご担当の多くが「発行が予定より遅れたことは偏に編集子の怠慢にて」と書いておられました。本当はサボっていたわけではないでしょうに奥ゆかしいですね。今はほとんどワープロファイルで原稿を頂いていますがムカシはそんなわけにはゆきません。手書きの読みにくいのをようやく判読して、文字数から誌面の割り付けをして、仕上がってきたガリのプリントには今さら修正できない誤字があつて今度は正誤表、とご苦勞は随分であったこととお察しします。今の担当でよかった。

さて、再来年は旧制高校の遠足部が山岳部になって90年を迎えます。「創部90周年に寄せて」とか「90年の歩みに想う」とかの題でご寄稿をお願いすることになりそうです。ぜひ早めに構想をご準備ください。

鬼が大笑いしそうな再来年のことも気になりますが、普通に鬼が笑う来年の原稿もぜひよろしくお願いいたします。

原稿宛先 山嶽寮編集担当

大森雅宏

電話／ファクシミリ

Eメール

山 嶽 寮 第68号
甲 南 山 岳 会
神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学内

2013年（平成25年）10月

編集人 大森雅宏 印刷 カツヤマ印刷

